

島原市埋蔵文化財調査報告書第9集

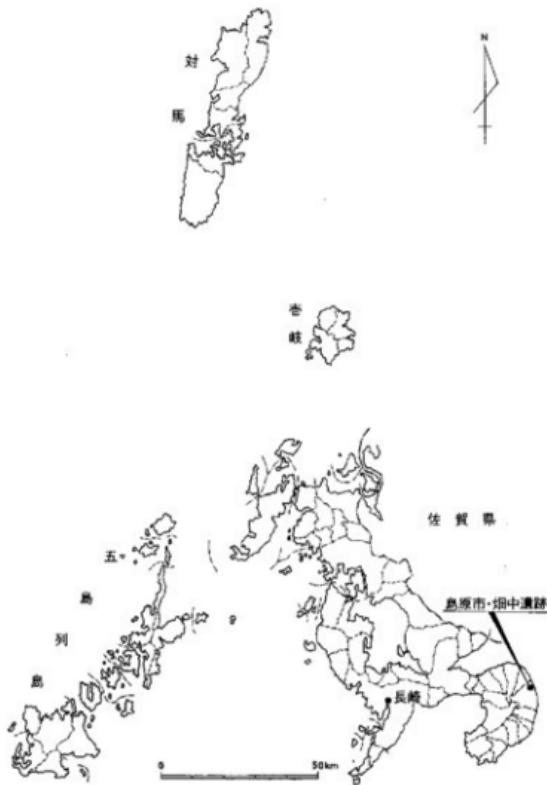
# 畠中遺跡

1994

長崎県島原市教育委員会

島原市埋蔵文化財調査報告書第9集

# 畠中遺跡



1994

長崎県島原市教育委員会

## 本文目次

	頁
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の地理的歴史的環境	1
III 調査	
1. 試掘調査	3
2. 本調査	6
IV 番号と遺構	
1. 土層	11
2. 遺構	11
V 出土遺物	
1. 縄文土器	17
2. 弥生時代・古墳時代・中世の土器	30
3. 石器	37
VI 番号遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査	41
VII まとめ	49

## 挿図目次

第1図 番号遺跡位置図	2
第2図 試掘調査・本調査区配置図	4
第3図 TP 4 土層及び埋カメ	5
第4図 遺構配置図	7
第5図 上層図	9
第6図 カメ棺墓・製鉄遺構配置図	12
第7図 2・3号カメ棺墓	13
第8図 4号カメ棺墓	14
第9図 製鉄遺構及び北側土層	15
第10図 駐車場部分南西部	16
第11図 縄文時代の土器(前期)	18
第12図 縄文時代の土器(前期)	19
第13図 縄文時代の土器(前期)	20

第14図 縄文時代の土器（晩期）	21
第15図 縄文時代の土器（晩期）	22
第16図 縄文時代の土器（晩期）	24
第17図 縄文時代の土器（晩期）	25
第18図 縄文時代の土器（底部）	26
第19図 縄文時代の土器（底部）	27
第20図 縄文時代の土器（晩期）	28
第21図 縄文時代の土器（晩期）	29
第22図 弥生・古墳時代の土器	31
第23図 上部器（Ⅲ）	32
第24図 中国製輸入陶磁器（青磁・白磁）	33
第25図 瓦質土器及び東播系遺物	34
第26図 常滑・石鍋・瓦質土器	35
第27図 須恵質土器	36
第28図 石器（1）	37
第29図 石器（2）	38
第30図 石器（3）	39
第31図 石器（4）	40

## 表 目 次

第1表 供試材の履歴と調査項目	41
第2表 供試材の化学組成	46

## 図 版 目 次

図版 1 遺跡近景	53
図版 2 遺構検出状況	54
図版 3 遺構検出状況	55
図版 4 遺構検出状況	56
図版 5 調査風景・他	57
図版 6 E-2区西側・土層及び溝断面・他	58

図版 7	駐車場部分南半部（東から）・他	59
図版 8	製鉄遺構（F-11区）	60
図版 9	埋カメ 2・3・4号	61
図版10	縄文時代の土器（前期）	62
図版11	縄文時代の土器（前期）（晚期）	63
図版12	縄文時代の土器（前期）	64
図版13	縄文時代の土器（晚期）	65
図版14	縄文時代埋カメ	66
図版15	縄文時代埋カメ	67
図版16	縄文時代土器（晚期）	68
図版17	縄文時代土器（底部）	69
図版18	縄文時代土器（底部）	70
図版19	縄文時代土器（晚期）	71
図版20	縄文時代土器（晚期）	72

## 序 文

畠中遺跡は島原市の北部三会地区に位置し、中原町、亀の甲町及び御手水町に分布していく、栗石原遺跡に次ぐ広範な遺跡地で、今まで本格的な発掘調査を実施したことではなく、その存在が注目されていた。

今回の調査に至った経緯は、平成2年11月に約200年振りに噴火した雲仙普賢岳噴火による一連の災害で、工場が埋没したため新たな工場の建設が、この遺跡地に計画された為です。

当委員会は、噴火災害の重大性及び緊急性を十分に認識しながらも、この遺跡の重要性に鑑み、工場側と協議を重ね、今回範囲確認調査した結果、縄文時代晚期と中世の文化層を確認したものです。

この結果を踏まえ、遺跡の取扱いについて再度当該工場と協議を重ね、工場の建物部分と、浄化槽、駐車場部分について更に本調査を実施し、他の部分については現状保存することになりました。

調査に当たっては、噴火災害に直撃され甚大な被害を受けながらも、いちはやく工場再起に向かわれた、九州ロンナークロージング株式会社のご協力に心から感謝申し上げます。

幸いこの調査に要した経費の大半は、財團法人雲仙岳災害対策基金からの補助を受けて、順調に終了することが出来た事を申し添えます。

なおこの発掘調査、整理作業に際し、ご指導・ご助言を賜りました関係機関、関係者をはじめ、炎天下のもと、作業に従事して下さいました皆様に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成6年3月

島原市教育委員会教育長

北 田 久

## 例　　言

一. 本書は、九州ロンナークロージング三会工場建設に伴って実施した長崎県島原市下宮町甲2435-2、3445-3に所在する畠中遺跡の緊急発掘調査報告書である。

二. 島原市教育委員会が調査主体で、調査期間は次のとおりである。

試掘調査 平成3年7月24日～7月26日（3日間）松本慎二調査担当（現南有馬町教育委員会）

本調査 平成3年9月20日～9月19日（18日間）

三. 調査関係者（本調査）は以下のとおりである。

島原市教育委員会 小島 秋澄 社会教育係長（現、社会教育課課長補佐）

長崎県教育庁文化課 田川 肇 調査係長（現、文化課課長補佐）

副島 和明 主任文化財保護主事（現、文化課係長）

村川 逸朗 文化財保護主事

四. 本書は分担執筆した。V-1を長崎県教育庁文化課、安楽勉が、その他のI～IV、V-2、VIIを村川が執筆した。

五. VIについては、たたら研究会会員大澤正己氏に玉稿を賜った。

六. 本書の編集は、村川による。

## I 調査に至る経緯

雲仙・普賢岳の災害で九州ロンナー島原工場が埋没したため、新たに三会地区に同工場の建設が計画された。

島原市教育委員会は、工場予定地が畠中遺跡の範囲に含まれるので、工場側と協議を重ね、平成3年7月24日～同7月26日の3日間にわたり、当該予定地内の範囲確認調査を実施した。

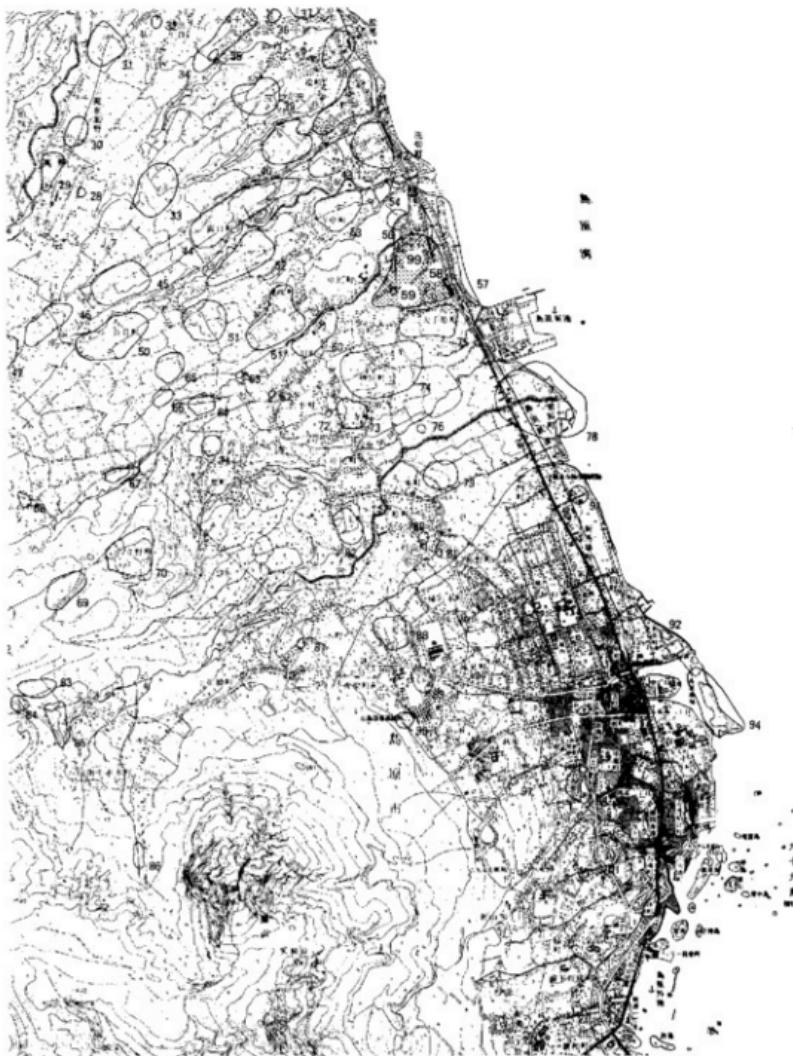
その結果、縄文時代晚期と中世の文化層を確認したので遺跡の取扱いについて再度協議を行い、当該工場の建物の基礎部分と、浄化槽、駐車場の部分については発掘調査を実施することにし、他の部分については現状保存することになった。

## II 遺跡の地理的歴史的環境

この三会地区は、島原半島の東部、雲仙山系北東麓の火山性扇状台地（三会原）に位置し、東は島原湾に臨む。地形の大部分は丘陵をなし、畑作が主で現在も県内有数の畑作地帯である。北から金洗川・中野川・今井川・寺中川・西川・中河川が島原湾に注ぎ、河口部に水田地帯が広がっている。地名の由来は、古くは「三江」とも書き、金洗川・西川・中河川の川尻に三つの入江があるところから生まれたと伝えられる（三会村物語）。

この三会地区（三会原）には、標高250～350mの高燥域に所在する礫石原遺跡を始めとして、縄文時代晩期の遺跡が多い。海岸部に向かって標高が下がるに従い、上油堀、下油堀、長貫A、長貫B、南浦沢、大塚後、津吹、三会中学校、寺中A、寺中B、下宮、稗田原、そして本報の畠中の各遺跡が所在している。この三会原全体に縄文時代晩期の遺跡がまんべんなく分布しており、その集中度は特筆するに値するものと思われる。弥生時代の遺跡では、中野川と西川の河口部の沖積地上に、それぞれ中野川遺跡と西川遺跡がある。また、丘陵上には原口B遺跡、上中野遺跡、守中A、寺中B遺跡等がある。海岸近くの海岸段丘上には、景華園遺跡があるが、遺跡カードによれば、弥生時代前期末（？）～同後期の時期を主体とし、遺構としてはカメ棺、箱式石棺、支石墓（2基）等が確認されており、出土遺物としては、銅鏡（？）、銅劍、銅鉢、管玉等がある。

中世では、寺中B遺跡と中野川遺跡に挟まれるかたちで守中城跡がある。



第1図 番中遺跡位置図（58の網かけ部分）

### III 調 査

#### 1. 試掘調査

平成3年7月24日～同年7月26日の3日間試掘調査を実施した。工事予定区域内に、2m×5mの試掘場を4箇所を任意に設定し、それぞれTP1～TP4とした。

層位は、

- 第1層……………表上（耕作土）（40cm～50cm）
- 第2層……………暗褐色土層（20cm～50cm）
- 第3層……………黒色火山灰土層（20cm～30cm）
- 第4層……………褐色土層（10cm～20cm）
- 第5層……………黄色粘質土層

である。

第2層は1cm～2cm大の礫を含み植物根も見られ、やわらかい。第3層は1cm～2cm大の礫を含み、炭も多く見られた。第4層は1cm～3cm大の礫を含み、やや硬い。第5層は基盤である。

遺物は第2層～第5層に土器片や石器が出土していて、各層が遺物包含層であることが確認できた。

TP1……………南北に2m×5mの試掘場で、第1層の耕作土下には第2層～第5層まで確認でき、それぞれ遺物が含まれる。基盤まで表土から120cmをはかる。

〔出土遺物・遺構〕

- 土器片……………55点
- 須恵器片……………2点
- 黒曜石剝片・石器……………15点
- 溝様遺構（幅1.4m、深さ40cm）

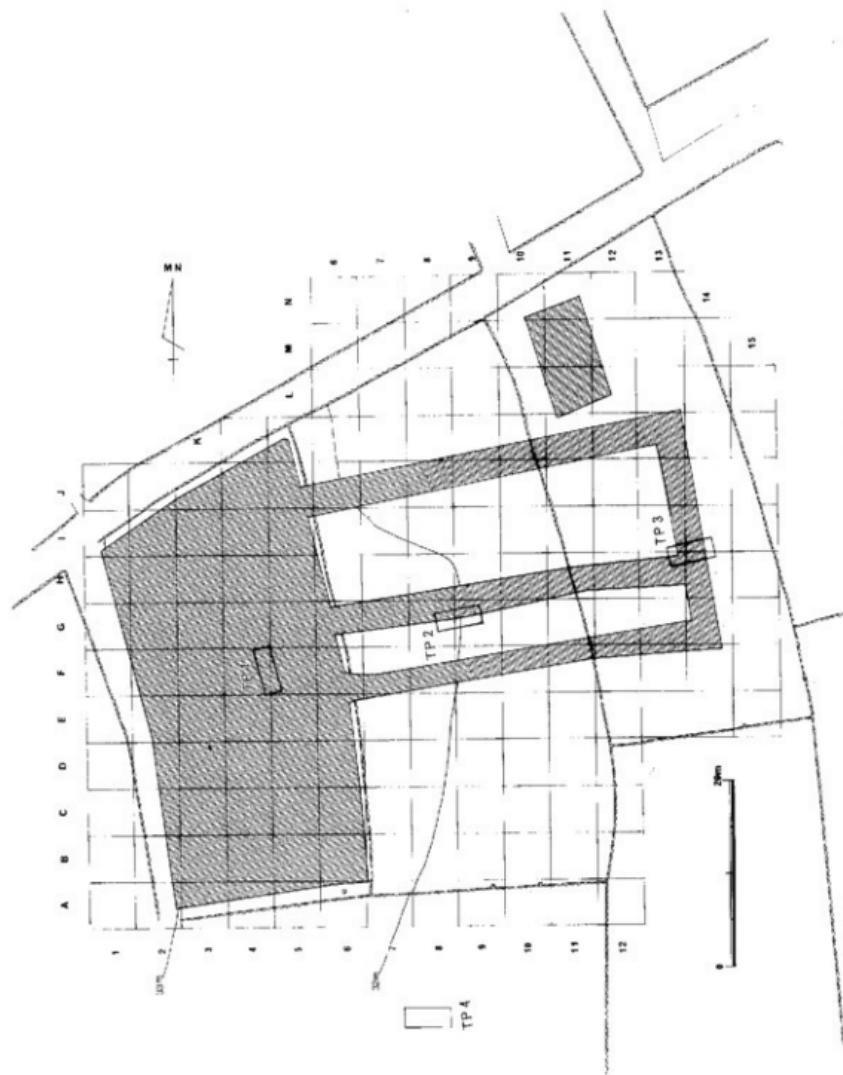
TP2……………東西に2m×5mの試掘場で、第1層の耕作土下には第2層～第5層まで確認でき、それぞれ遺物が含まれる。基盤まで表土から140cmをはかる。

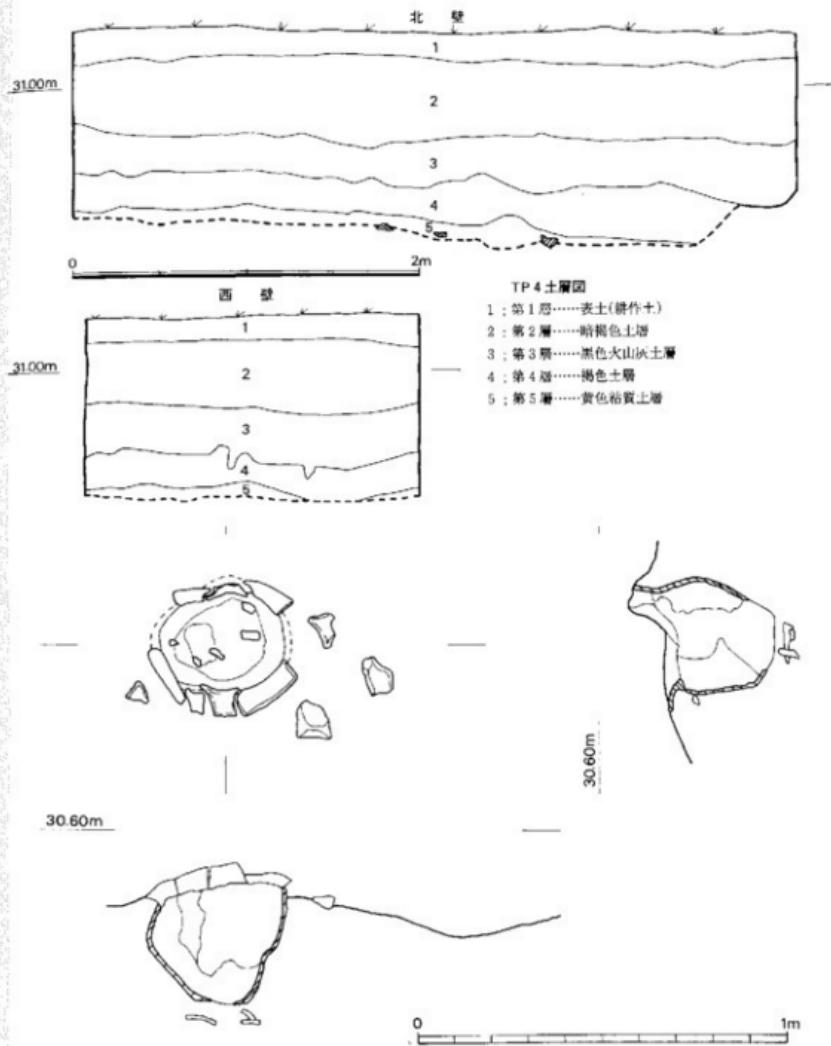
〔出土遺物・遺構〕

- 土器片……………80点
- 黒曜石剝片・石器……………13点
- 磁器片……………2点

TP3……………東西に2m×5mの試掘場で、第1層の耕作土下には第2層～第5層まで確

第2図 試掘調査・本調査区配置図





認でき、それぞれ遺物が含まれる。基盤まで表土から120cmをはかる。

〔出土遺物・遺構〕

- 土器片……………150点
- 黒曜石剣片・石器……………16点
- 土師質土器片……………3点

TP4…………東西に2m×5mの試掘場で、第1層の耕作土下には第2層～第5層まで確認でき、それぞれ遺物が含まれる。基盤まで表土から120cmをはかる。

〔出土遺物・遺構〕

- 土器片……………198点
- 黒曜石剣片・石器……………14点
- 土師質土器片……………5点
- 磁器片……………10点
- 埋カメ……………1基

今回の試掘調査では、縄文時代晚期の埋カメや、溝様遺構を検出した。この遺跡は、本試掘調査以前は弥生時代中期以降のものと思われていたが、埋カメ等の検出により縄文時代晚期からの遺跡であることが確認できた。

遺構としては、幅1.4m、最深部で40cmをはかり東西に掘られている溝と、この溝の南側約20mの所には、上器底部を故意に壊して取り除いたと思われる埋カメ（縄文時代晚期）が出土しており、縄文時代晚期の重要な資料である。溝については、さらに東側と西側に延びる状況であり、今後の発掘調査によって遺跡の内容がより明確に把握できるものと思われる。

## 2. 本調査（第4図）

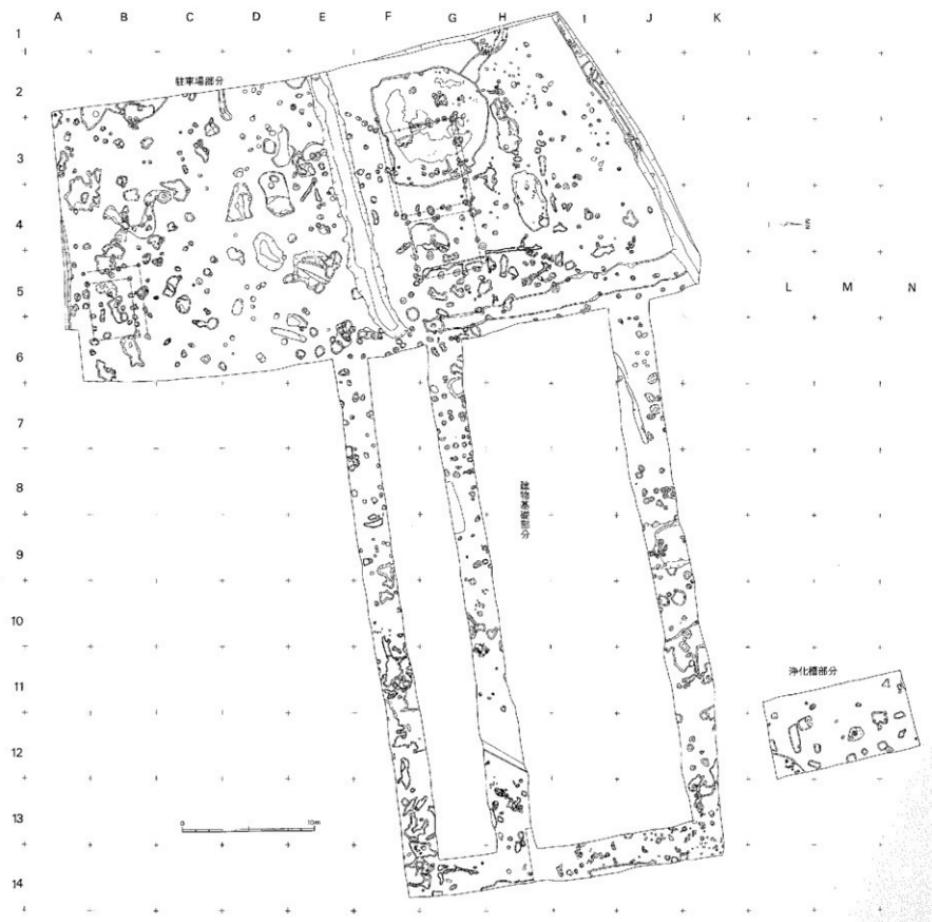
調査は、工場予定地内に、東西南北に5m単位で調査区を設定し、1.580m<sup>2</sup>について実施した。調査区全域について表土層10cm～90cm程をバックホーで除去し、第III層黒色土層（中世）、第IV層茶褐色上層（縄文時代晚期）、一部第V層黄色粘質上層（縄文時代前期）まで掘り下げた。

その結果、第III層～第IV層上面に中世の遺構群、第IV層～第V層上面に縄文時代晚期の遺構群が検出された。

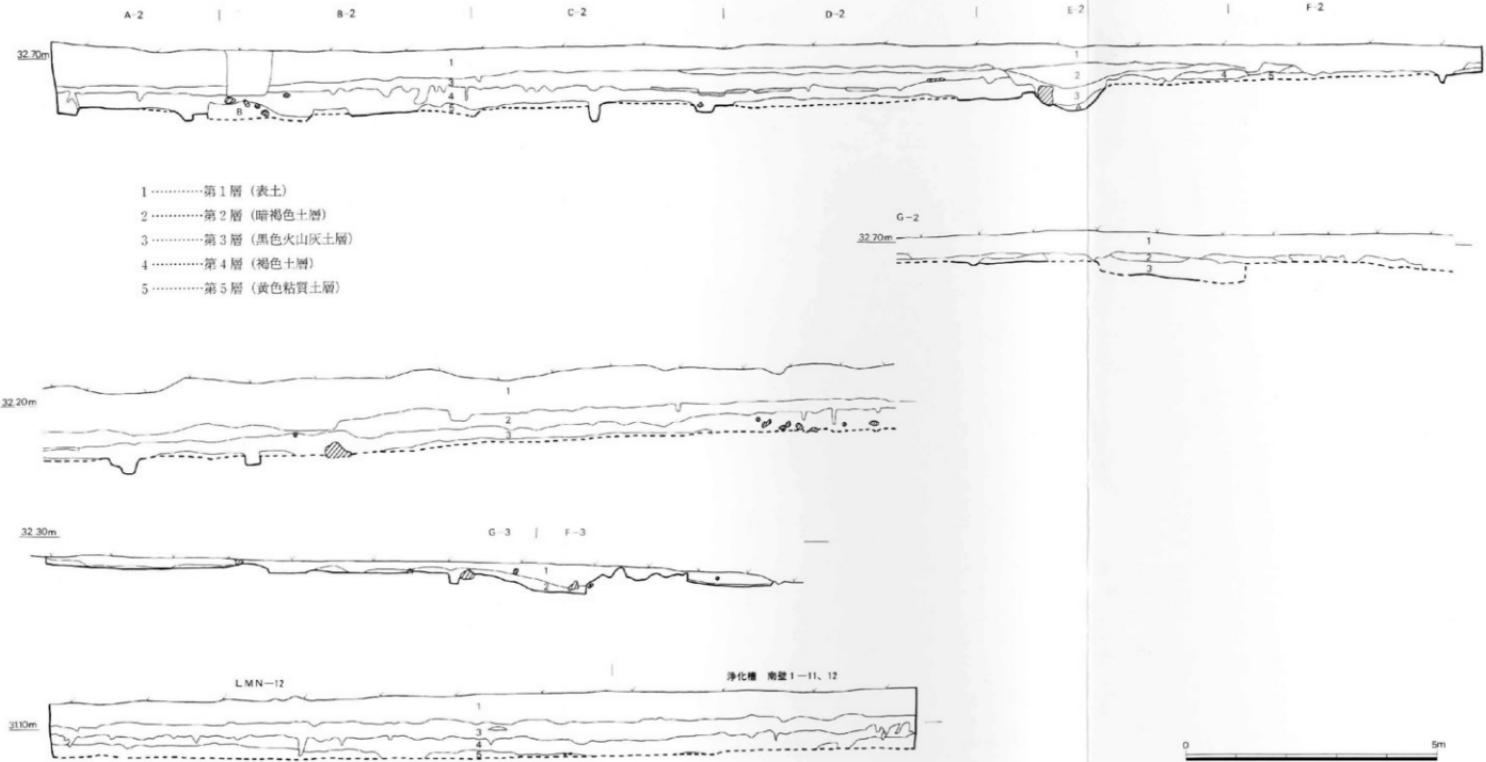
### ① 駐車場部分の調査（A～G—1～6区）

第III層に中世（鎌倉時代）の遺構群を検出した。

一方を溝（幅1.6～12.0m、深さ0.3～1.0m）。西側部分は未検出。北側については一見溝跡とも見てとれるが、道路を開削した時の削り跡とも考えられる。）で開み、その内側に径8m程の



第4図 潟構配置図



第5図 上層図

柱穴状の住居跡（？）が1基と、建物跡及び柱穴群を検出した。また、溝に接して東西に走る道路状遺構（幅5～8m）を検出し、周間に柱穴群を検出している。

第IV層に縄文時代晚期の生活跡および墳墓群（カメ棺墓3基）を検出している。

第V層に縄文時代前期の遺物が出土した。

## ② 建物の基礎部分の調査（A～G・6～13区）

①と同様に第III層に中世の柱穴群と第IV層に縄文時代晚期トのカメ棺墓1基と土器、石器が多数出土した。

特にE～K・9～11区に中世の製鉄遺構を3基検出し、その周囲より中国製輸入陶磁器、中國の錢貨（太平通宝、至元通宝）、ふいごの羽口および鉄鋤が多数出土した。

## ③ 処化槽の調査（L～N・10～12区）

①、②と同様に第III層に中世の柱穴群と遺物、第IV層に縄文時代晚期の遺物が出土した。

# IV 層序と遺構

## 1. 土 層（第4図）

試掘調査時の土層堆積と同一層序を示し、近隣の発掘調査が実施された遺跡、島原市稗田原遺跡、有明町一野遺跡とも基本的に同一層序であると思われる。

層位は、第1層……表土（耕作土）バックホーにて除去

第2層……暗褐色土層

第3層……黒色火山灰土層

第4層……褐色土層

第5層……黃色粘質土層

## 2. 遺 構

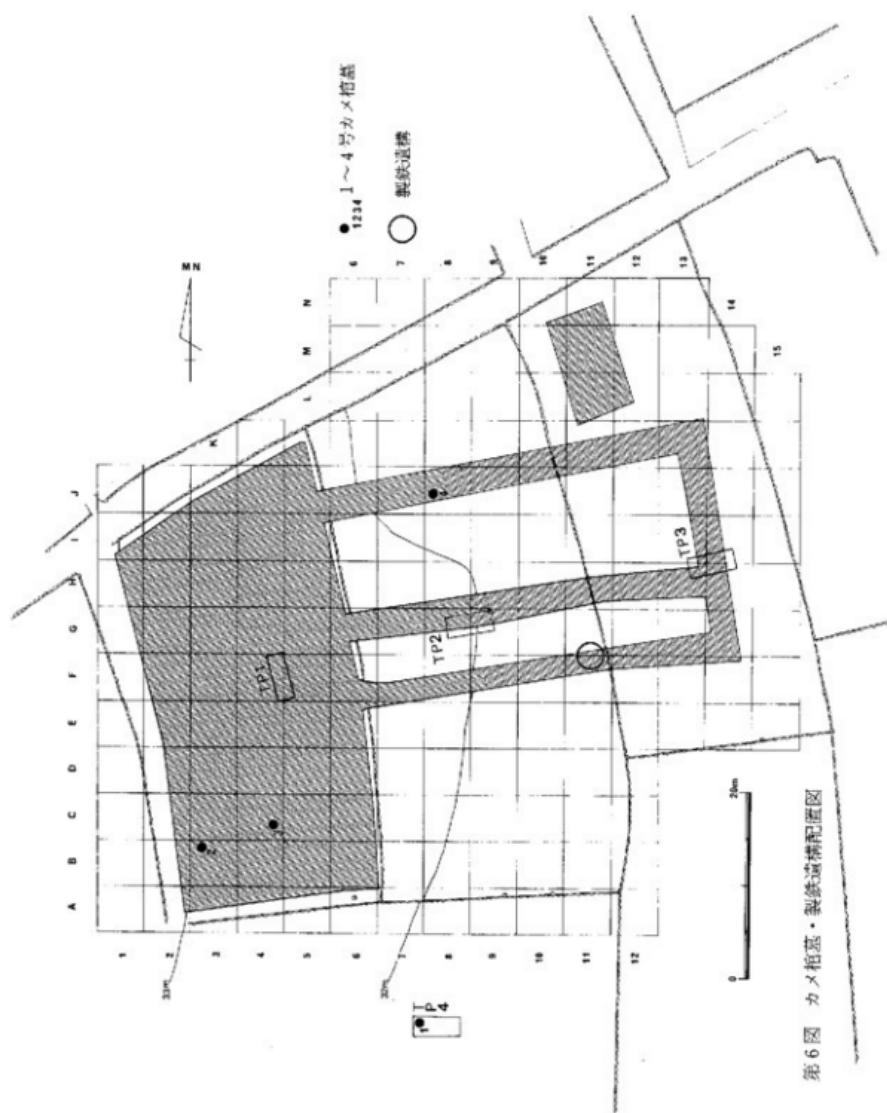
縄文時代晚期のカメ棺墓、中世期の溝、建物跡、製鉄遺構等を検出している。

1号カメ棺墓は、TP Iの北西隅、2号カメ棺墓は、本調査区B-3区北西隅、3号カメ棺墓はC-4区南東隅、4号カメ棺墓は、J-8区西側でそれぞれ検出している。3号カメ棺墓は、掘り込み等は検出していない。

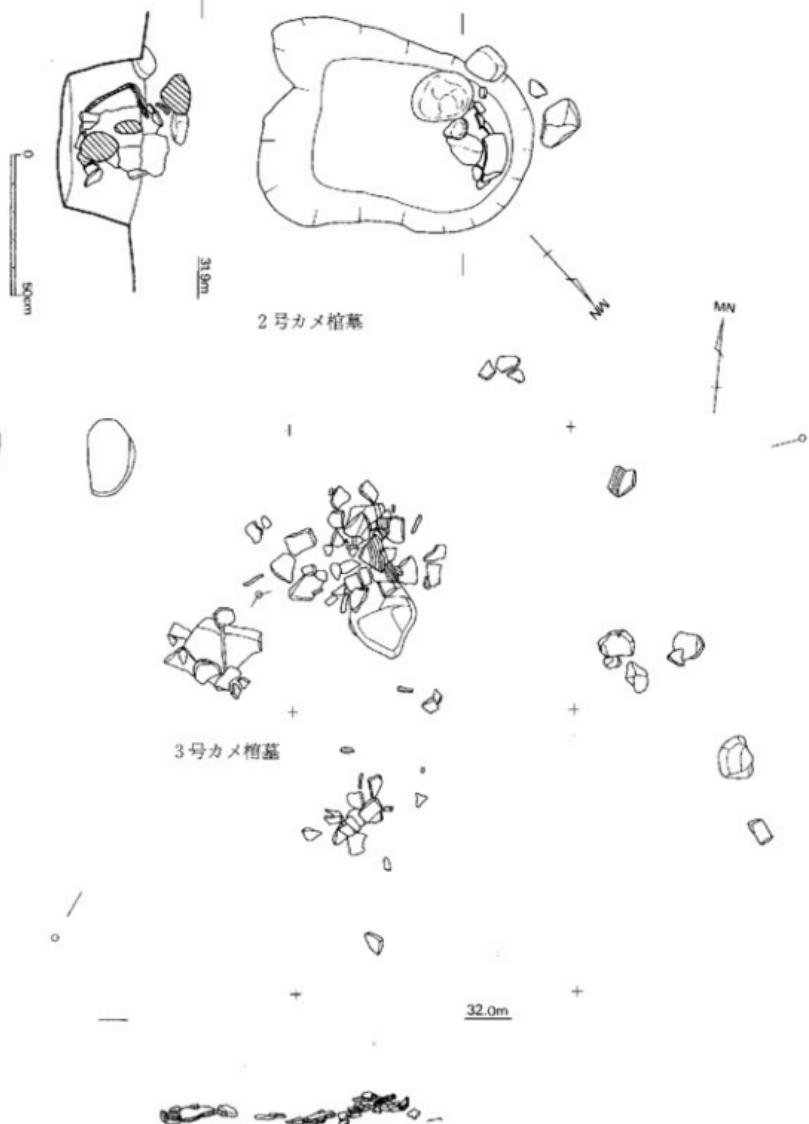
中世期の方形にめぐら溝を南北側と東側で確認した。北側の溝は、東側の溝を切り込んでいる状況がうかがえるので、時期差が考えられる。恐らく道路建設時の堀り方の痕跡であろう。溝の幅は2m内外、深さは遺構検出面から5、60cm程度である。

方形の溝で区画された区域及び、B-5、6区で建物跡を検出した。方形区画内で検出した建物跡は、小規模なものである。

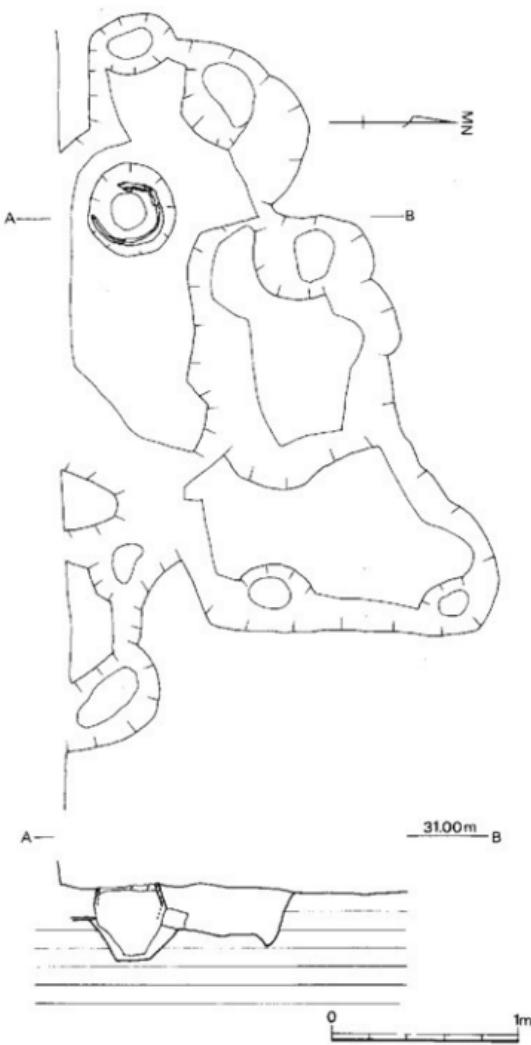
F-11区等では製鉄遺構を検出した。



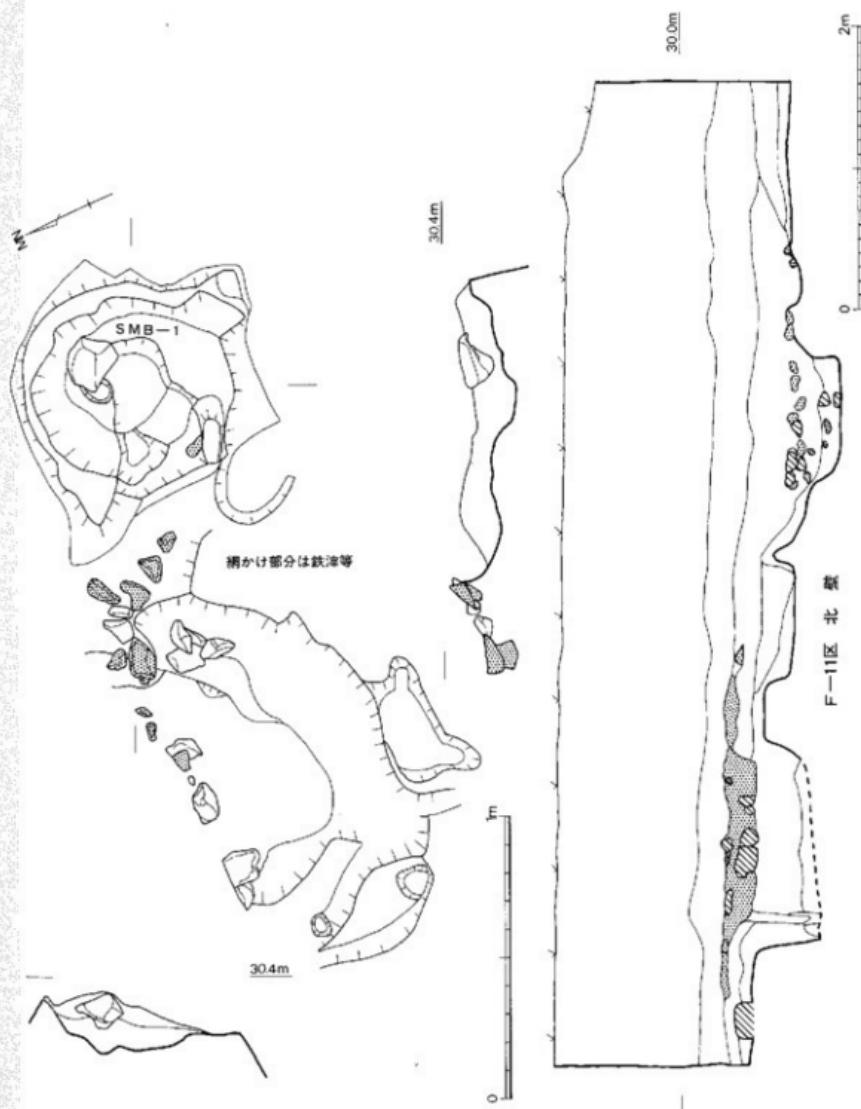
第6図 カメ柏窓・製絲通構配置図



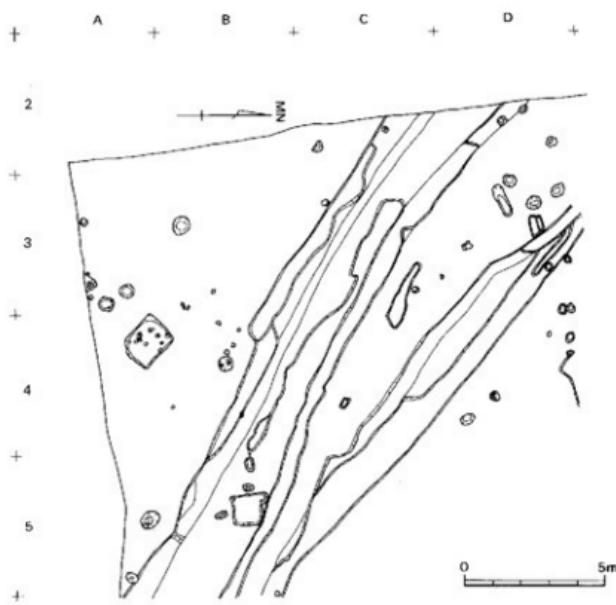
第7図 2・3号カメ棺墓



第8図 4号カメ植墓



第9図 製鉄遺構及び北側土層



第10図 駐車場部分南西部

## V 出土遺物

### 1. 繩文時代の土器

繩文土器は大きく二つの文化層に分けられる。5層を中心とした前期円筒系土器の一群と、3～4層出土の晩期土器の一群である。前者は近乍島原半島南部を中心として類例の増加している資料であり、後者は島原市を中心として諫石原遺跡や百花台遺跡群などに見られる晩期土器の一群である。

ここではA・B・Cの3群に分け、さらに細かくI・II・III類に分類し、概観してみよう。

#### A群 前期の土器、円筒系土器（第11図～第13図）

円筒系土器には文様構成の上からいくつかのヴァリエーションが認められる。ただ、胎土や焼成はほぼ似かよった特徴をもっている。

A-I 1～3 山形押型文と考えられる施文である。山形は間のびしてくずれ、2などは特に顕著である。口縁部はやや外反するが、丸くおさめられている。

A-II 4～27 器形も文様もほぼ前者と同じで、一見間のびした山形押型文に見えるが、沈線の部分に押引きの跡が見られる。口縁部は丸くおさめられ、内側は丁寧に磨かれている。

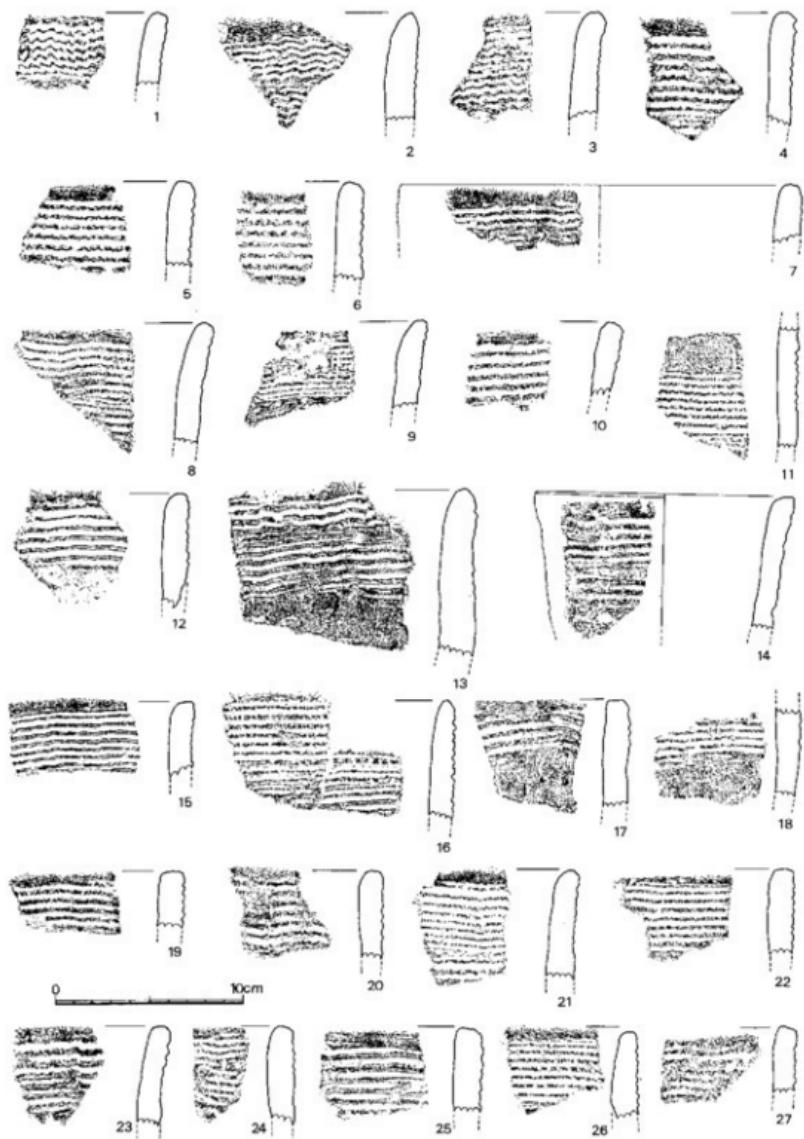
A-III 28～29 沈線を施文したあと鮮明な押し引き文が残る。この押し引き文は全体には認められない。直径は16cm内外でさほど大きな器形にはならない。

A-IV 30～32 沈線を胴部から上に施文し、下部には縦に沈線を付けている。縦の沈線は浅く、30のように消されているものもある。

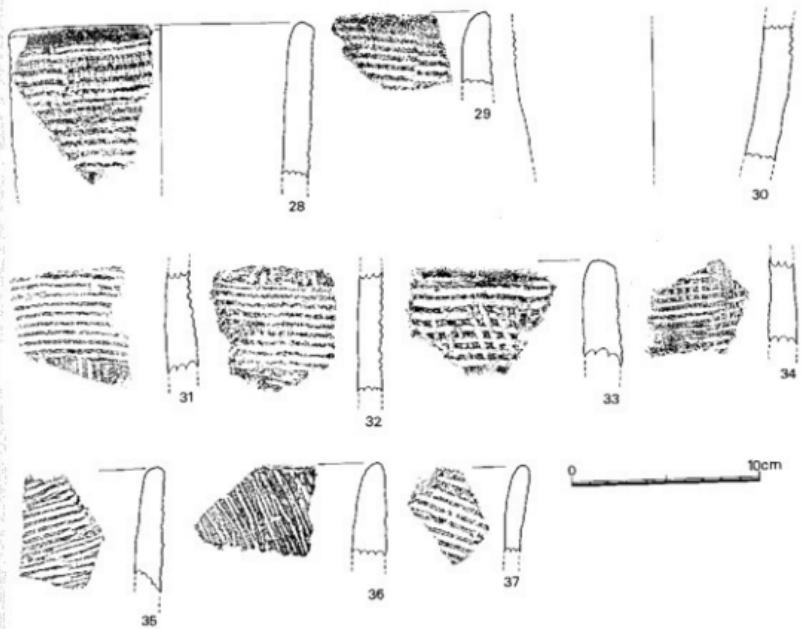
A-V 33～34 先ず斜めに沈線を付し、次に横に沈線を施している。格子状を呈するが、粗い施文で、全体に及んでいない。

A-VI 35～37 器形や胎土は円筒系土器であるが、文様が35や36のように条痕文とした方がよいものや、37の斜行沈線を入れた。これらの文様はI～Vの一群とは違ったものであり、37は手向山式土器に近いとも考えられる。

A群の土器は胎土に角内石や長石、白い砂粒を含み、焼成は良好で灰褐色ないし褐色に近い色調である。また全体に共通している点は口縁から内部にかけて丁寧に磨かれていることである。これと全く類似の土器は1991年に調査された至近の距離に位置する有明町一野遺跡から出土している。層位はIV層の明褐色粘砂層であり集石遺構を伴っている。何らかの関係が考えられる。県内での類似の土器を出土する遺跡は、諫早市の大村湾奥の丘陵に位置する鷹野遺跡や西輪久道遺跡があり、押型文土器や集石を伴っている。県外では鹿児島から熊本県の内陸部にかけて類例が見られる。鹿児島県の中尾田遺跡や石峰遺跡および花ノ木遺跡などである。熊本県では大丸・藤ノ迫遺跡や桑鷺土橋遺跡である。福岡県では最近になって立花町白木西原遺跡から出土例が報告されている。いずれも共通性は内陸部に位置しているということである。



第11図 桶文時代の土器（前期）



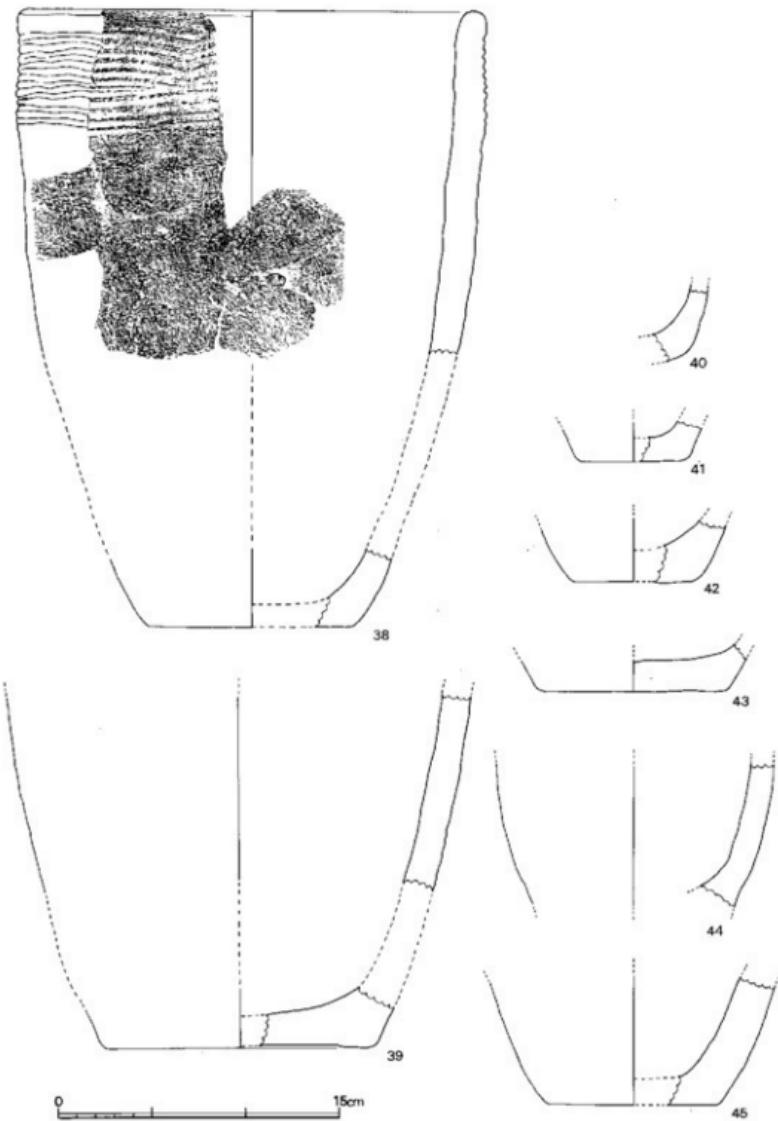
第12図 繩文時代の土器（前期）

#### B群 晩期の土器（第14図～第21図）

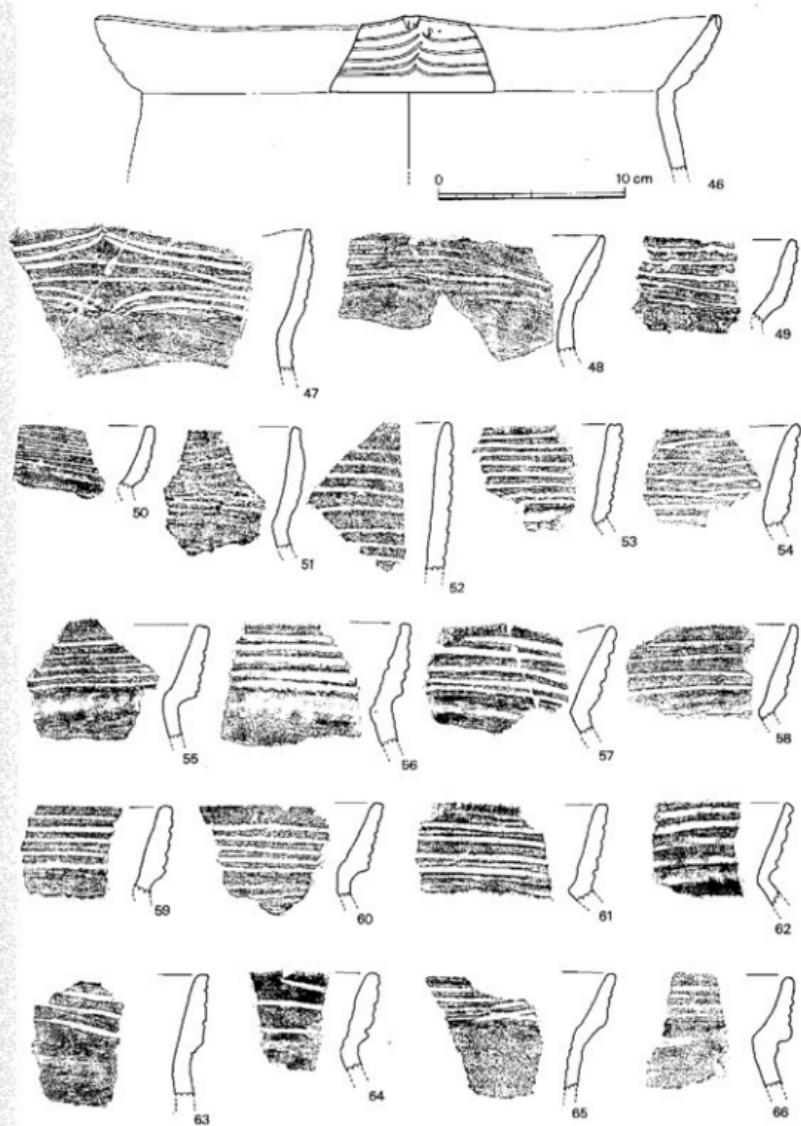
晩期の上器は粗製土器と黒色磨研土器に分けられるが、数量の上では圧倒的に粗製土器が多い。また有文土器と無文土器では後者が断然多いが、これも他の遺跡と比較して普通的現象ではある。ここでは粗製土器をB I～V類に精製土器をC I～IIIに分類して概観してみる。

B—I 46～50 46は波状口縁を呈し、頂部には凹文が施される。広く外反する口縁部には4条の細沈線が巡るが、波状頂部で山形を呈する。内外ともに丁寧に磨かれている。47は46と比較すると口縁の外反は弱いが、同じ波状を呈している。文様構成は上下に2条の波状沈線が描かれ中央に2本の沈線が巡っている。51まで文様の違いはあるものの波状口縁という点から同類とした。

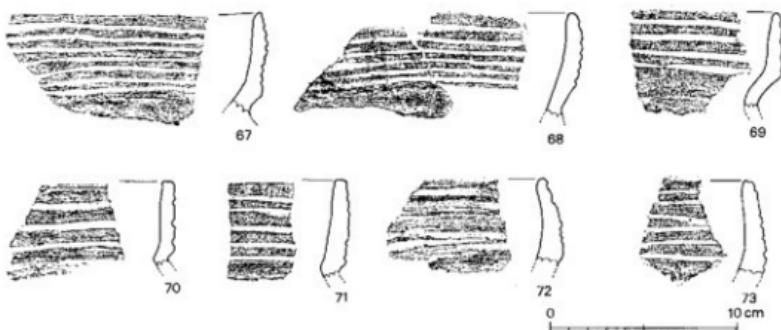
B—II 52～62、75～77 口縁部がわずかに外反し頸部が屈曲し、胴部が張り出すタイプの一類で、口縁部の沈線は鋭利なヘラ状の工具で施されている。75～77は口縁から胴部そして底部まで復原できる上器であるが、77はほぼ完形である。76は頸部が鋭利に「く」の字形に屈曲し内外とも条痕調整のあとヘラ磨きされている。口径は30.5cmを測る。77は口縁文様帶の幅が



第13図 縄文時代の土器（前期）



第14図 繩文時代の土器（晩期）



第15図 縄文時代の土器（晩期）

76より厚いが、脇部張り出しが弱く丸くおさめられている。やはり条痕調整のあと磨かれているが、粗く仕上げられている。全体にススの付着を見る。

B-III 63~66 口縁部はやや外反し文様帶の幅が狭くなっている。文様は沈線が粗雑に描かれている。また64のように波状の頂点に刺突を入れているものもある。頸部の肩曲からすると胴部はかなり張ると思われる。

B-IV 67~74 口縁が頸部の立ち上がり部から内湾する一群である。74は底部を欠くが、ほぼ完形に復原できる。口縁文様帶には細い沈線を入れ内湾する。胴部は張り出すものの、丸くなり下方は若干外反し、底部近くでは丸味を帯びている。器壁は粗く仕上げられ、輪積の痕跡が見られる。復原口径38.5cm、胴部41cmを測る。器高は推定で約49.2cmを測る。

B-V 78~89 粗製無文土器の一群を一括した。78は浅鉢と深鉢の中間的要素の土器である。ラッパ状に開いた口縁は胴部より大きく、頸部から胴部は短く屈曲している。胎土には白い砂粒を多く含み、ある程度精選されている。外面はヨコナダであるが、内面は磨かれている。79~83は口縁部直下がわずかにくびれ、口縁帶と胴部を区分している。84~89は口縁部が大きく開きやや内湾しながら胴部がすぼまっていく形態の深鉢である。89は粗い器壁を斜めに調整している痕跡が条痕様を呈している。

底部 90~136

粗製土器の底部である。わずかにあげ底気味の土器が数点のほかはすべて平底である。90~125までは深鉢形の底部と考えられるが、126~135は盆形の底部である可能性が強い。129は立ち上がり部から上の粘土の接合部から欠失するが、胎土に結晶片岩を粉状にしたものに入れ滑石状に見える。このての土器は1点だけである。また131は焼成の関係で内面が黒色になり全体が磨かれている。135は平坦な底から立ち上った器壁は外に大きく開き球状になるものと思われる。器壁うすく内面にはスス状の付着物が見られる。136は深鉢高台の底で下方に1条の沈線を巡らし、縱の沈線で区画している。

#### C群 精製土器 (第20図~第21図)

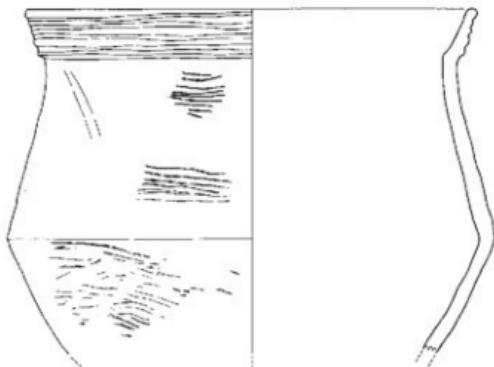
C-I 137~140 口縁部が波状を呈し、文様帶の沈線は波状の頂部に集中するよう施文されている。なお施文は研磨した後で、鋭利なヘラ状工具で付けられている。140だけは施文のあとに研磨されているが、円と思われる付着物がわずかに観察できる。なお138と140は褐色の研磨土器である。

C-II 141~144 細い沈線だけの文様で142は半精製である。141と143は口縁部内面に沈線で頸部との区切りを設けている。また144は幅広の文様帶を行すが、内面にはやはり浅い沈線を巡らし、屈曲する頸部と区別している。

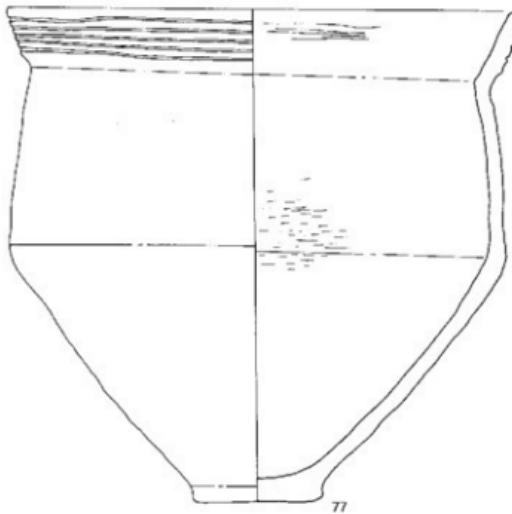
C-III 145~166 黒色磨研の浅鉢土器である。口縁は玉縁状で外面に1条の沈線が巡り内面には段が付く。口縁から頸部にかけてはやや間のびして長く、胴部は「く」字形に屈曲しゆるやかに内湾しながら底部に至る。胎土はよく精製され、内外面とも丁寧に研磨されている。



75

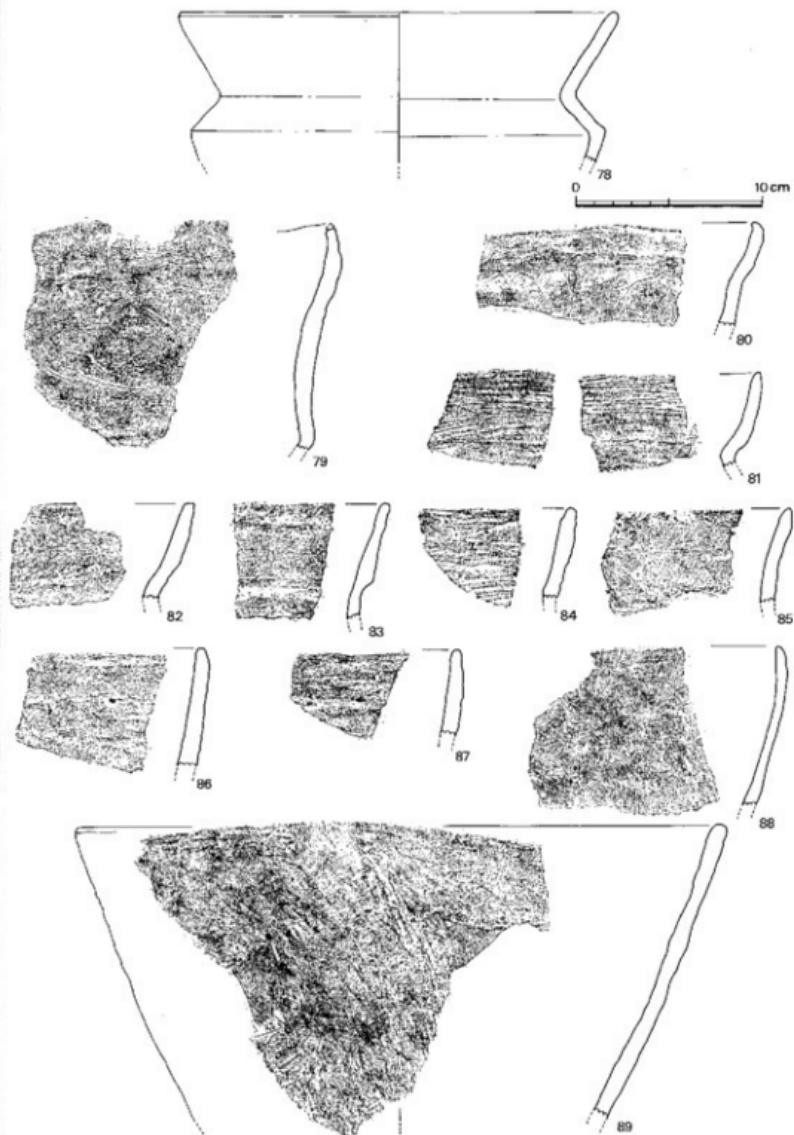


76

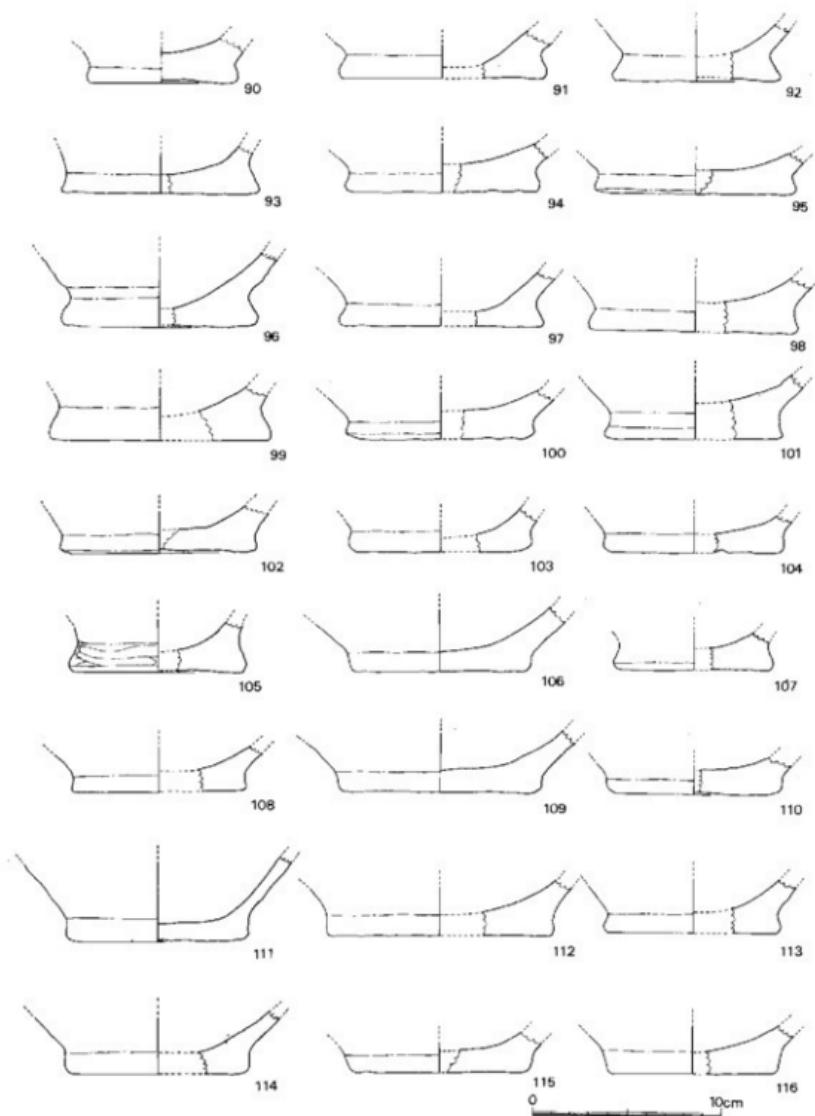


77

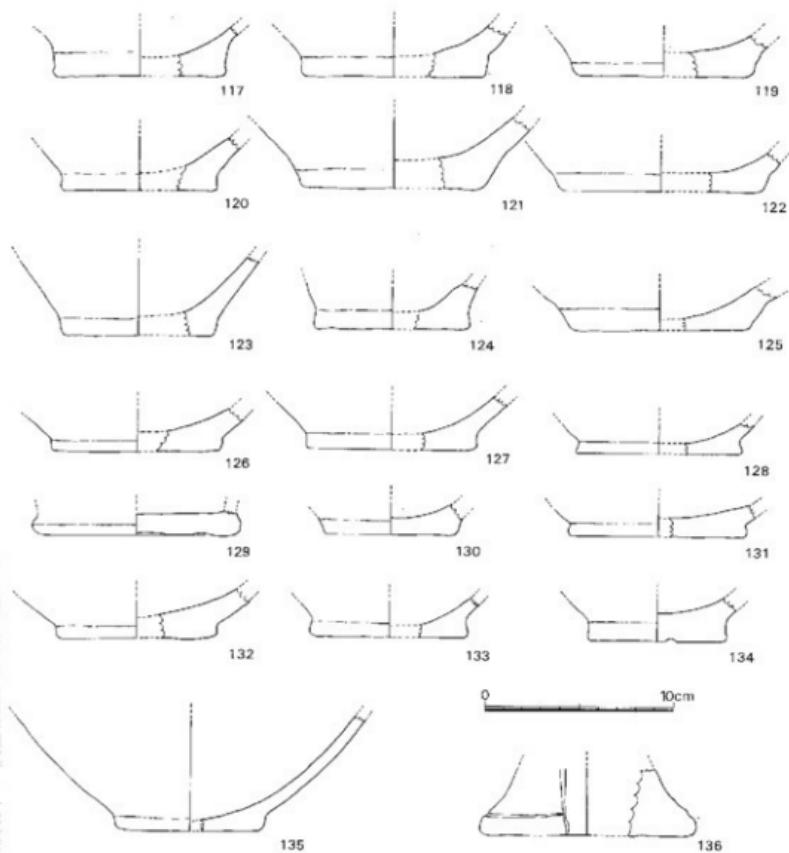
第16図 繩文時代の土器（晩期）



第17図 縄文時代の土器（晩期）



第18図 縄文時代の土器（底部）

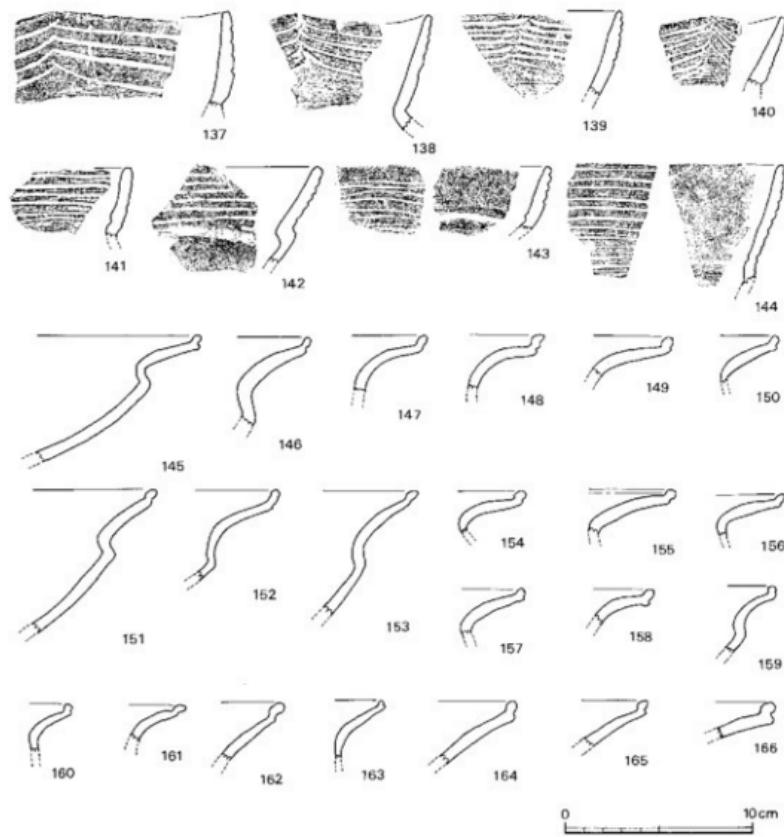


第19図 繩文時代の土器（底部）

頸部は弱い屈曲するものと、大きく屈曲するものとがある。

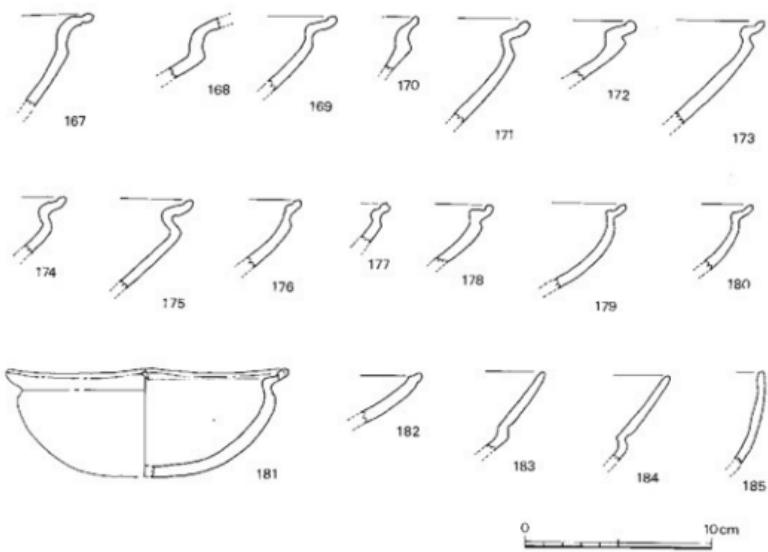
C - IV 167~182 玉縁状の口縁と頸に続く部分が一緒に退化している土器群で、腹部の屈曲も頸部と見分けがつかなくなっている。底部も181のように塊状に丸くなるものが多くなってくる。

C - V 183~184 I ~ IVに入らない一群で183・184のように口縁が外反し頸部がくびれ副部は丸くなるものと思われる土器である。C - I の退化したものであろう。185は塊状になる器形である。



第20図 繩文時代の土器（晩期）

晩期の土器はB・Cの2群で概観したように口縁部に沈線をもつ文様帶の存在から山の寺期より一時期古い礫石原期併行の晩期前半葉～後葉にかけてが考えられる。蝶ネクタイやリボン状鱗状突起の文様帶が見られないことは、礫石原期より一時期新しいことも考えられる。なお刻目突帯文土器が図示しなかったが、1点含まれていることもこのことを裏付けるようである。今回の調査で晩期の遺跡が比較的標高の高い所から低い所に移行する、中間的な位置を示しており、近年刻目突帯が出土した中木場遺跡や瑞穂町京ノ坪遺跡などにも影響を及ぼしていったと考えられる。



第21図 繩文時代の土器（晩期）

## 2. 弥生時代・古墳時代、中世の土器

1～5は弥生土器、6～9は須恵器である。1はK-12区III層、2はT-13区III層、3はK-12区III層、4はD-4区III層、5はD-5区IV層上部、6は表面採集、7はC-4とC-5区III層、8はC-4区III層、9はC-4区III層からの出土である。

10～34は土師器の皿である。10、11、20、32は表面採集品、12はI-13区III層、14はF-3区IV層上面、15、19、26はF-11区III層の出土であるが、19は製鉄遺構の近くで出土。16はA～E

1～6区III層、17はJ-10区、18はC-3区III層、21はF-5区溝内、22は同じくF-5区のピット内からの出土である。23はI-5区溝内、24はB-1区III層、25はG-6区IV層上面、27はD-6区III層、29はF-4区III層、30はF-10区III層、31はB-5区III層、34はG-7区からの出土である。

第24図の35～56は中国製輸入陶磁器である。35～38、44等は縦蓮弁の青磁碗である。46～48は白磁、49～51、53～56は青磁の底部、52は青磁の蓋ものである。55は表面採集品、35、45、40、56はH-11区III層、36はF-13区IV層、37、41はD-6区III層、38はF-8区III層、39はE-F-4区の溝内、42、52はG-7区III層、43はB-1区III層、44はG-14区III層、46はF-7区III層、47、51はA-E-1～6区III層、49はF-5区溝、50はF-2・3、G-2・3区、53はG-7区III層、54はC-6区III層の出土である。

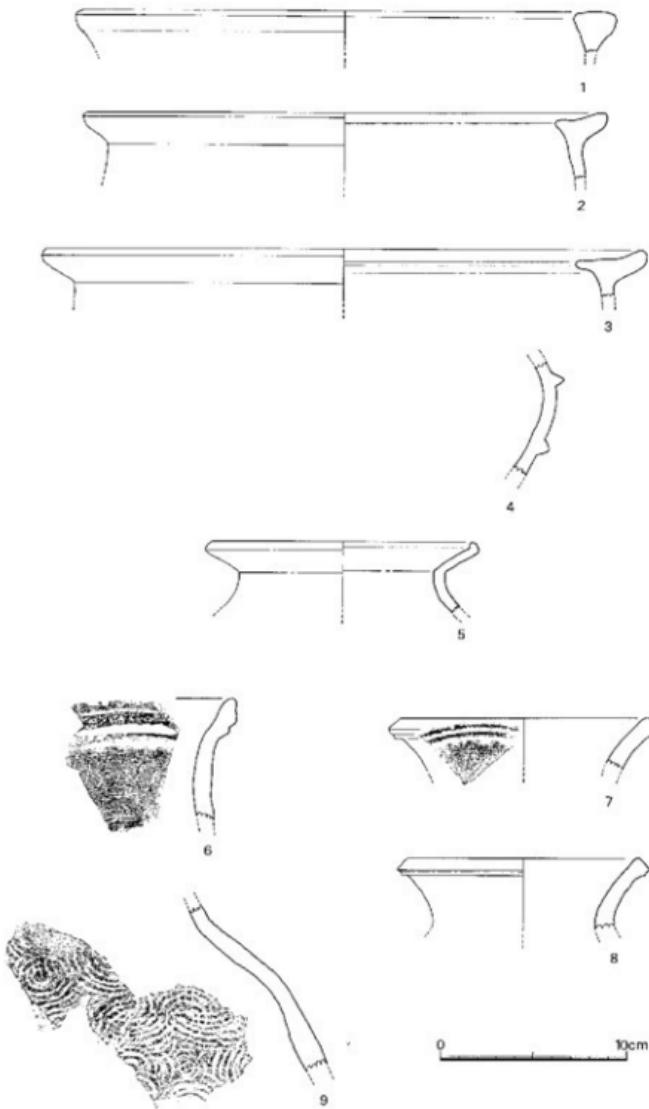
第25図の57～64は瓦質土器類である。57、58は土鏡、59は火舎、60は備前の捏鉢、61～64は東播系須恵質捏鉢である。いづれも口縁端部を上・下につまみ出す特徴をもっている。57はI-11区、58はF-4区溝内、59はH-11区III層、60はC-5区III層、61はJ-6区III層、62はD-5区III層、63はF-6区IV層上面、64はF-11区III層からの出土である。

第26図の65は常滑産の萩の口縁部である。E-5区III層、66は石鏡口縁部片である。J-7区III層、68は銅柄俊夫氏より東海地方の焼物であるとの御教示を得た。72、73は管状土鉢、79～83は捏鉢の底部である。80はF-11区カジバから、82はピット内からの山上である。その他は表面採集品。84～93は須恵質土器である。86はG-11区III層、87はJ-7区IV層、88はJ-10区カジバ、89はA-2区II層、90はE-2区溝内、91はF-5区溝内、92はH-11区III層内93はJ-8区III層からの出土である。

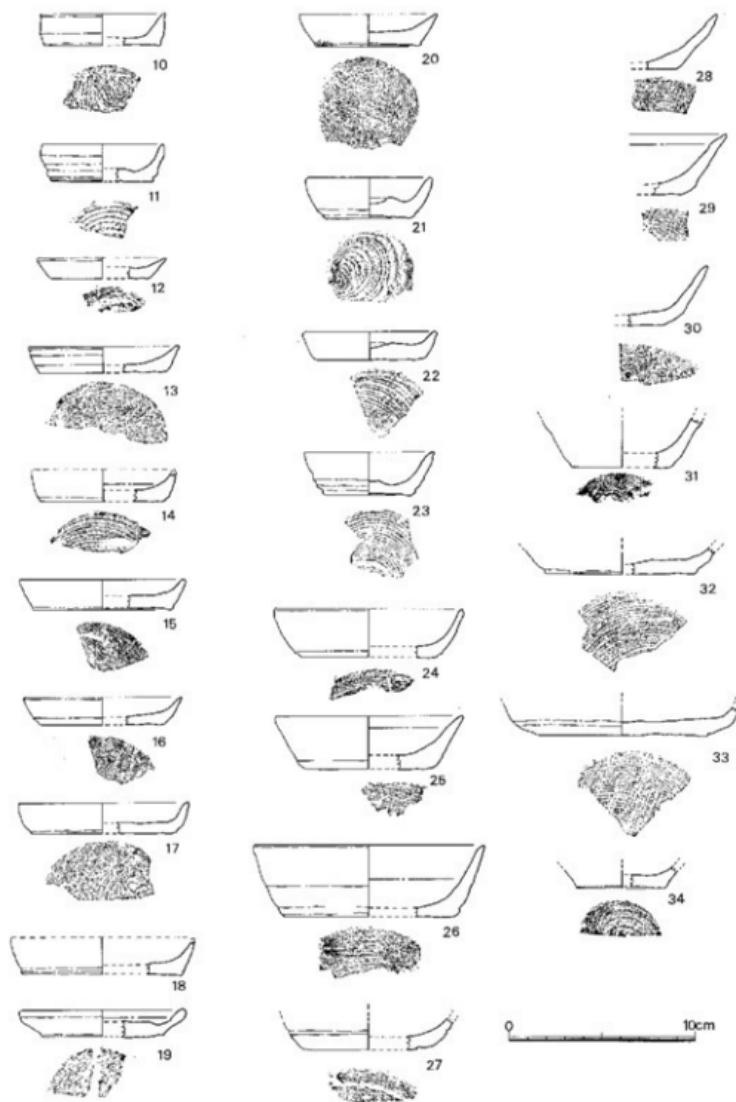
比較的数量がまとまった中世の時期の遺物の年代をみてみると、35～38、44等の縦蓮弁の青磁碗は13～14C代のものであろう。47、48の白磁は森田勉氏編年によれば15C前半代にくるものだろう。また、65の常滑産の壺は赤羽一郎氏編年のIV期前半代の範疇に入るものと思われ、14C後半代のものと思われる。なお、61～64の東播系の須恵質捏鉢等をみても14C後半代のものと思われ、割合としては該期のものが多いようである。

### 《参考文献》

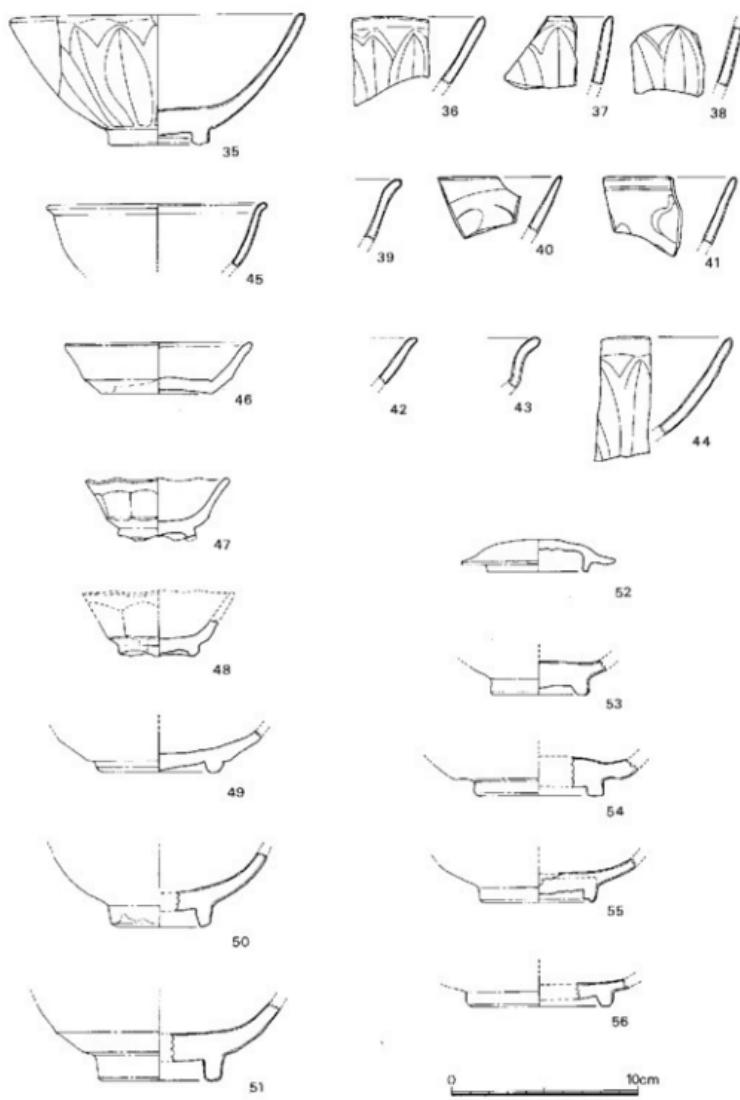
- 森田勉 14～16世紀の白磁の分類と編年「貿易陶磁研究No.2」日本貿易陶磁研究会  
赤羽一郎 常滑焼 中世窯の様相－考古学ライブラリー23 ニューサイエンス社。



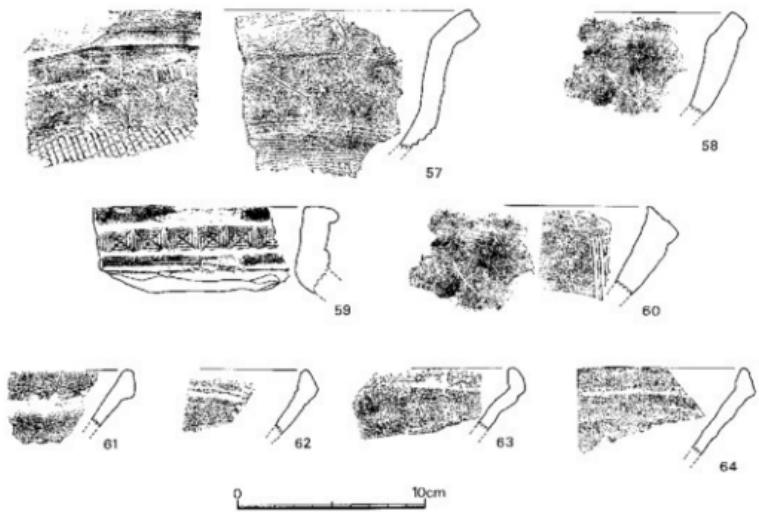
第22図 弥生・古墳時代の土器



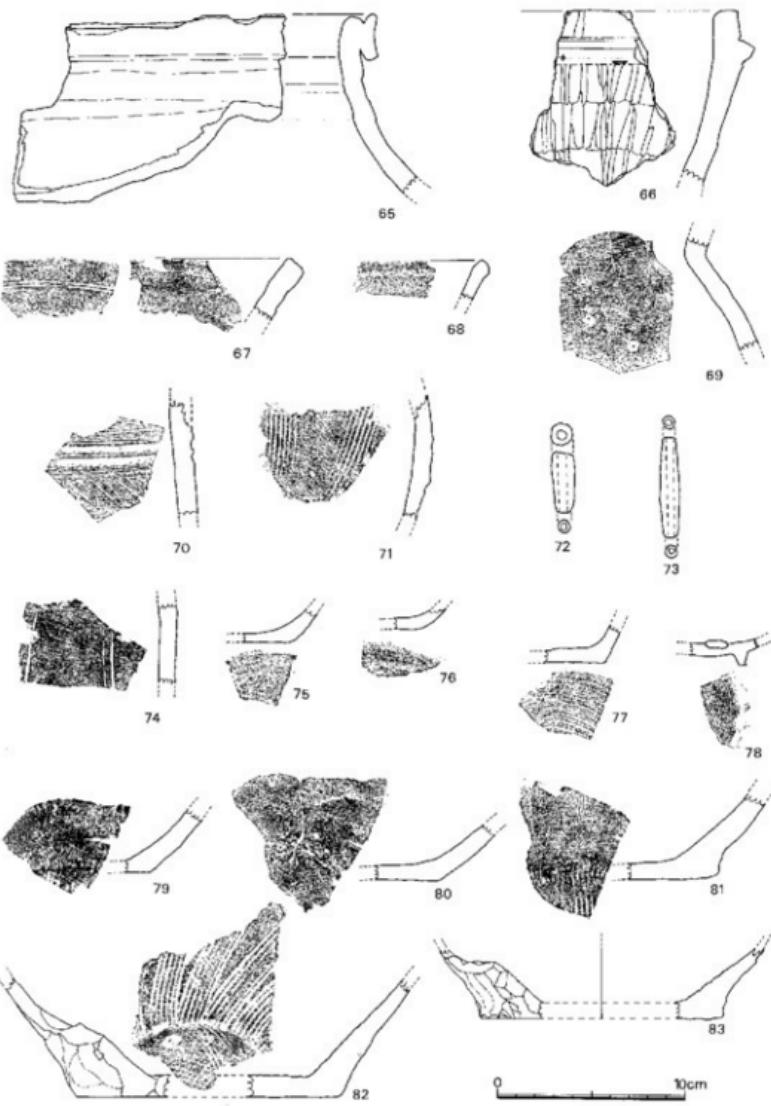
第23図 土師器(Ⅲ)



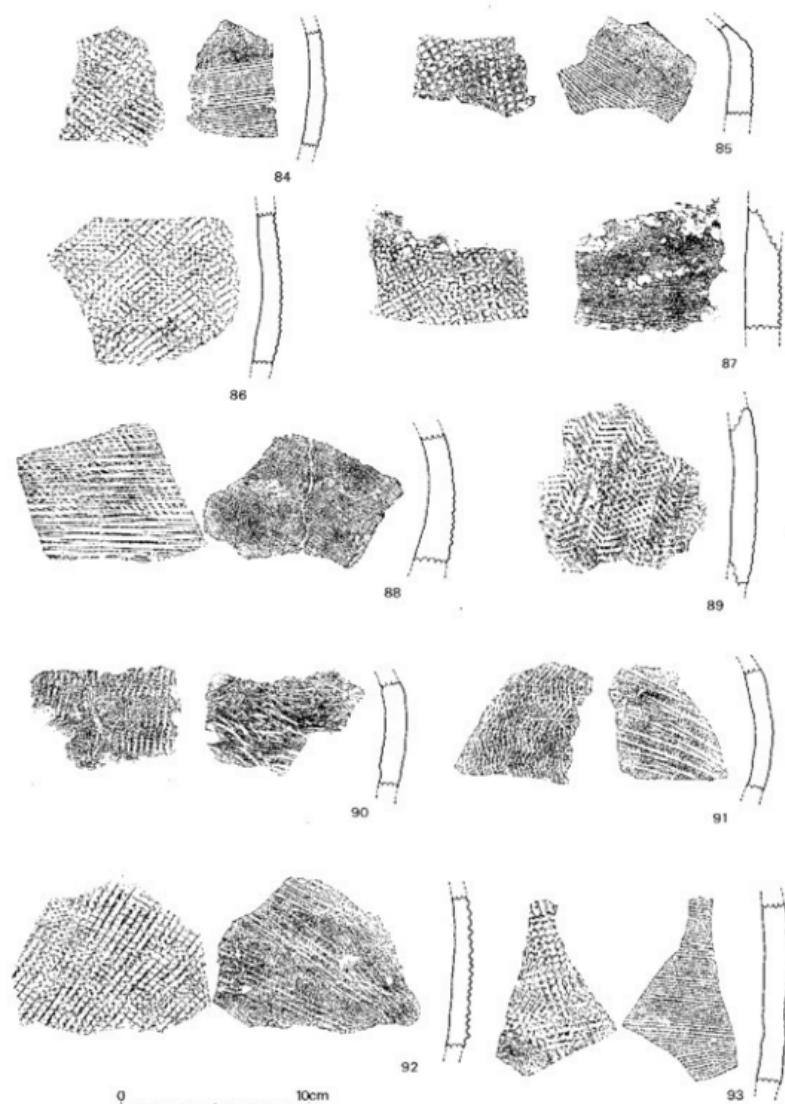
第24図 中国製輸入陶磁器（青磁・白磁）



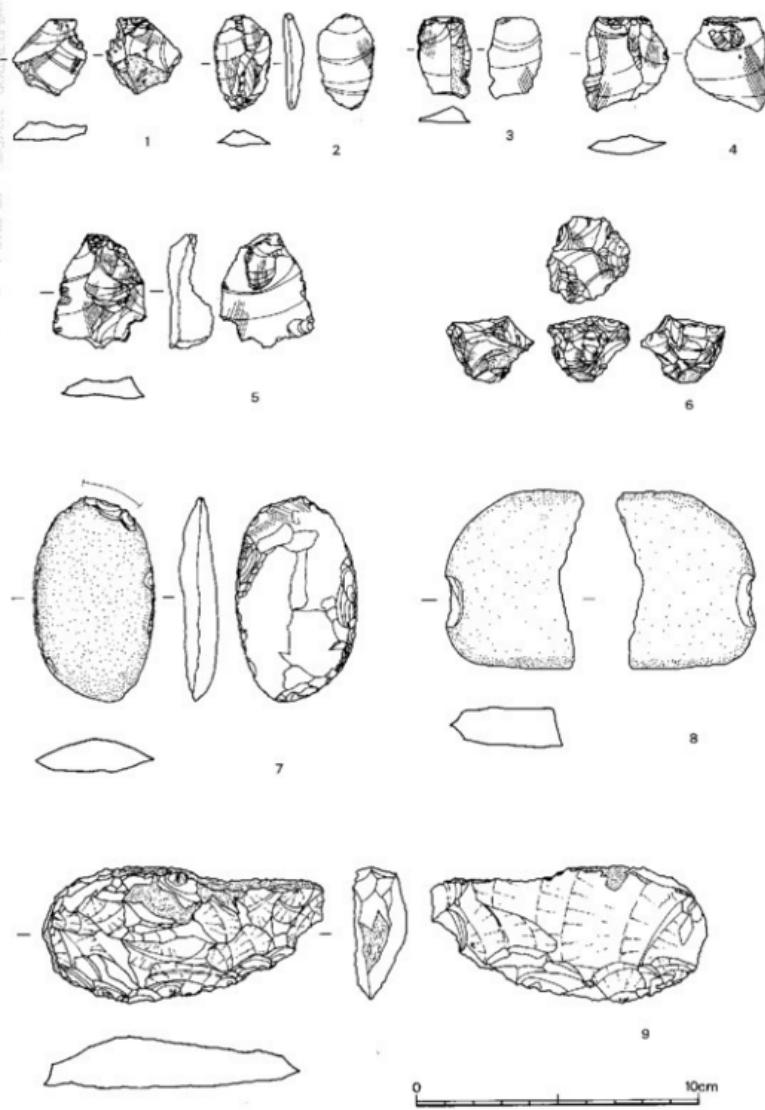
第25図 瓦質土器及び東播系遺物



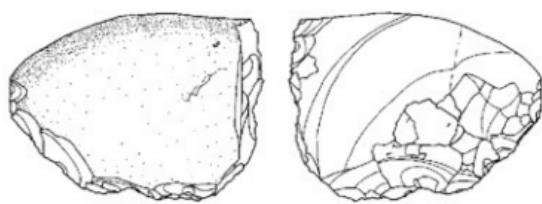
第26図 常滑・石鍋・瓦質土器



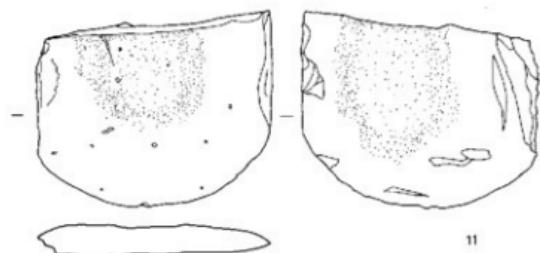
第27図 須恵實土器



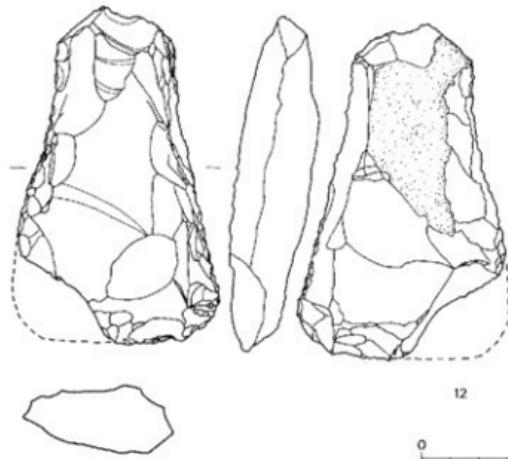
第28圖 出土石器(1)



10



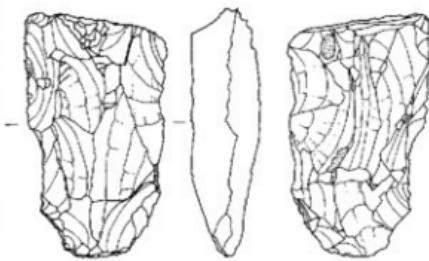
11



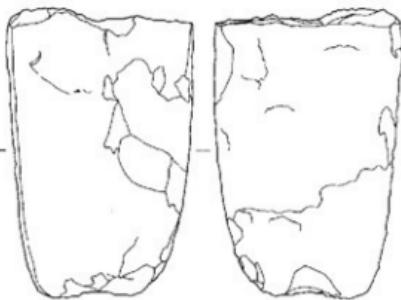
12

0 10cm

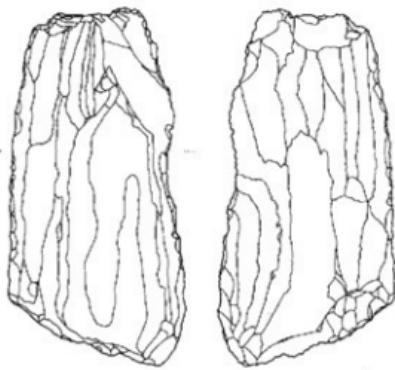
第29図 出土石器(2)



13



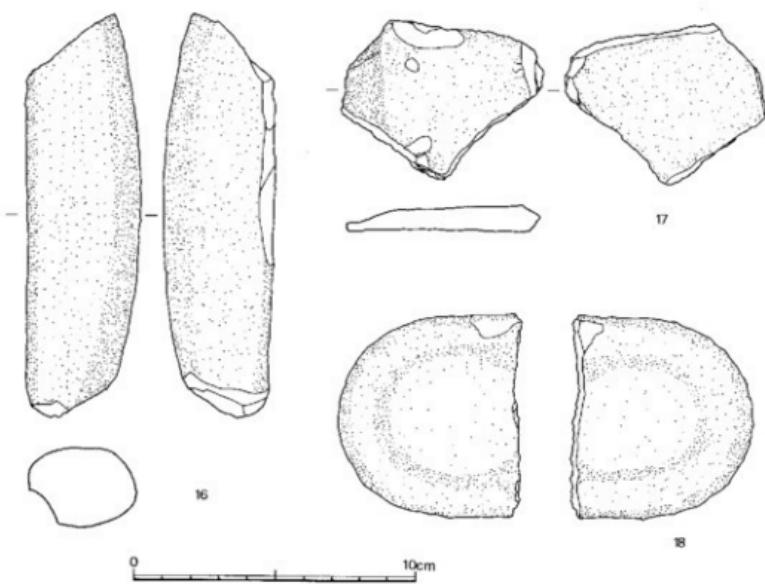
14



15



第30図 出土石器(3)



第28図 出土石器(4)

### 1. 石 器

黒曜石製使用痕ある剥片（2、3、5）、黒曜石製剥片（1、4）、黒曜石製石核（6）、円錐を利用したスクレーパー（7、10）、サヌカイト質安山岩製スクレーパー（9）、磨製石斧（11、14）、打製石斧（12、13、15）、敲石（16）、研石（17）、すり石（18）等がある。

1、6、10がD-4区、2がF-13区III層、5がB-5区、7～9、12、17がF-5区III層、11がC-6区IV層、14がB-5区III層、15がA-3区、18がA-2区ピット内からの出土である。

## VI 畑中遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

大澤正己

(1994. 05. 30)

### 概要

中世に比定される畠中遺跡出土の3点の鉄滓を調査して次の事が明らかになった。

〈1〉 出土鉄滓は、荒鉄（製錬生成錆で表皮スラグや塊込みスラグ、更には炉材粘土などの不純物を含む原料鉄：鉄塊系遺物）の成分調整で排出された精錬銀治滓に分類された。

〈2〉 鍛冶原料となった荒鉄は、チタン（Ti）含有量の高い塩基性砂鉄である。畠中遺跡から左程離れていない個所で製錬を行った製錬炉が存在する可能性をもつものと考えられる。

### 1. いきさつ

畠中遺跡は、島原市下宮町甲2,444外に所在する。雲仙・普賢岳の災害で九州ロンナー島原工場が埋没したため、代替地として工場予定地が畠中遺跡の範囲に含まれたので発掘調査が行われた。その結果、縄文時代晩期と中世の文化層が確認されて、後者から銀治炉3基と鉄滓が約90kg近くと羽口片などが出土した。この出土遺物を通して当時の鍛冶の実態を解明すべく専門調査の依頼を長崎県教育庁文化課経由で島原市教育委員会より要請された。

### 2. 調査方法

#### 2-1. 供試材

調査試料は第1表に示した3点の鉄滓である。

第1表 供試材の履歴と調査項目

符 号	試 料	出土位置	推定年代	計 測 値		調査項目		
				大きさ(mm)	重量(kg)	顯微鏡 組織	ピッカス 断面硬度	化学組成
SMB-1	精錬銀治滓	F-11遺構内	中世	225×140×30	3200	○	○	○
2	#	F-11	#	170×133×40	748	○	○	○
3	#	F-11	#	125×72×30	470	○	○	○

## 2-2. 調査項目

### (1) 肉眼観察

### (2) 顕微鏡組織

鉄滓は水道水で充分に洗浄乾燥後、中核部をベークライト樹脂に埋込み、エメリーワイヤード紙の#150、#240、#320、#600、#1,000と順を追って研磨し、最後は被研面をダイヤモンドの3 $\mu$ と1 $\mu$ で仕上げ、顕微鏡観察を行った。

### (3) ピッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組織の同定を目的としてピッカース断面硬度計 (Vickers Hardness Tester) を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた座みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡試料を併用した。

### (4) 化学組成

鉄滓の分析は次の方法で実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第1鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外線吸収法。

酸化硅素 ( $SiO_2$ )、酸化アルミニウム ( $Al_2O_3$ )、酸化カルシウム ( $CaO$ )、酸化マグネシウム ( $MgO$ )、酸化カリウム ( $K_2O$ )、酸化ナトリウム ( $Na_2O$ )、酸化マンガン ( $MnO$ )、二酸化チタン ( $TiO_2$ )、酸化クロム ( $Cr_2O_3$ )、五酸化磷 ( $P_2O_5$ )、バナジウム (V)、銅 (Cu) : ICP 法。ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

## 3. 調査結果と考察

### (1) SMB-1、鉄滓 (精錬鐵治滓)

#### ① 肉眼観察

鉄治炉の炉底に堆積した椀形渣である。表裏は黒褐色を呈し、上面肌は荒れて小凹凸状で中央部は蘆みをもつ。全面木炭痕をもち、薄く褐色粘土に覆われる。裏面は椀形の突起をもち、気泡と粘土との反応痕、木炭痕を残していた。3,200kgの大型品ではほぼ完形品であった。

#### ② 顕微鏡組織

Photo. 1 の①～③に示す。鉱物組成は大きく成長した白色粒状のヴュースタイト (Wüstite :  $FeO$ ) と、その粒内に微小淡茶褐色の鉄 (Fe) - チタン (Ti) 化合物を析出する。ヴュースタイトの粒間に淡灰色盤状結晶のファイアライト (Fayalite :  $2FeO \cdot TiO_2$ ) と暗黒色ガラス質スラグから構成される。精錬鐵治滓の品相である。

#### ③ ピッカース断面硬度

Photo. 1 の①に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕写真を示す。硬度値は549 Hv であった。白色粒状結晶は從来よりヴスタイトと称されている。ヴスタイトの文献硬度値は450~500 Hv である<sup>3)</sup>。これより若干高目であるのは、粒内に微小折出物が存在するとの、圧痕周辺のクラックの影響による誤差が加わった為と考えられる。白色粒状は一応ブスタイトと同定しておきたい。

#### ④ 化学組成

Table. 2 に示す。全鉄分 (Total Fe) は38.52%と若干低め傾向で、金属鉄 (Metallic Fe) が0.22%、酸化第1鉄 (FeO) 36.70%、鑄化鉄は左程多くなく13.97%であった。鍛治津としてはガラス質成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ) が多く41.85%あって、このうち、塩基性成分 ( $\text{CaO}-\text{MgO}$ ) が12.38%と異常に高いのが特徴的である。

砂鉄特有元素の二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) が3.15%、バナジウム (V) 0.05%は、塩基性砂鉄を始発原料とした荒鉄の精錬鍛治津の成分系である。酸化マンガン (MnO) 0.31%、銅 (Ca) 0.001%も砂鉄系の鍛治津を表明する。

#### (2) SMB-2、鉄津（精錬鍛治津）

##### ① 肉眼観察

表裏共に黒褐色を呈し、木炭痕を深くつけて荒れの激しい中塗みの椀形漆である。側面近くは気泡が肌を破って荒れ肌とする。裏面は椀形状突起で荒れ肌と滑らか肌の両方をもって木炭痕をつけていた。748 g の楕円形を呈している。

##### ② 顕微鏡組織

Photo. 1 の④~⑧に示す。鉱物組成は、白色粒状ヴスタイトと、茶褐色多角形のウルボスピネル (Ulvöspinel :  $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$ )、その粒間のファイヤライトと暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。該品のヴスタイト粒内にも鉄 (Fe) - チタン (Ti) 化合物がくっさりと析出する。これも精錬鍛治津に分類されるが、これらは、前述したSMB-1 よりも脈石成分の多い荒鉄を処理した傾向を示している。

##### ③ ピッカース断面硬度

Photo. 1 の⑦はヴスタイト、⑧はウルボスピネルの硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、前者で540 Hv、後者で733 Hv であった。ヴスタイトは前述したSMB-1 の白色粒状結晶に近似、ウルボスピネルはマグネタイトの文献硬度値が500~600 Hv なので、これにチタン (Ti) の固溶を考慮すると733 Hv はウルボスピネルに固定してもおかしくない値であろう。

##### ④ 化学組成

Table. 2 に示す。全鉄分は増加して49.28%あって、このうち、金属鉄 (Metallic Fe) が0.55%、酸化第1鉄 (FeO) 42.46%、酸化第2鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) が22.48%の割合であった。ガラス質成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} - \text{K}_2\text{O} - \text{Na}_2\text{O}$ ) が25.93%と若干減少し、二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) 4.10%、バナジウム (V) 0.10%とこちらは増加する。精錬鍛治も、前述のSMB-1 よりも前段階の工程における排出率といえよう。酸化マンガン (MnO) は大差なく0.34%、銅

(Cu) 0.001%であった。

### (3) SMB-3、鉄津（精錬鋳冶津）

#### ① 肉眼観察

楕円形の梢円長軸側の一部を欠損する。表面は荒れは少なく比較的滑らか肌に木炭痕を残す。緻密な肌である。裏面は楕円形突起で反応痕肌に木炭痕と少數の気泡を露出する。破面は黒色地に干渉色を認じ、大小の気泡を発していた。

#### ② 順微鏡組織

Photo. 2 の①～⑧に示す。鉱物組成は白色粒状ヴスタイトと、その粒内析出物、茶褐色多角形ウルボスピニル、ファイヤライト、少量の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。これも精錬鋳冶津の品癖であった。

#### ③ ピッカース断面硬度

Photo. 2 の⑦はヴスタイト、⑧はウルボスピニル結晶の硬度測定を行った圧痕写真を示す。硬度値は、前者で509Hv、後者が766Hvであった。各結晶は順微鏡観察で行った鉱物組成に同定できる。

#### ④ 化学組成

Table. 2 に示す。全鉄分 (Total Fe) は55.98%と増加して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.17%、酸化第1鉄 (FeO) 54.98%、酸化第2鉄 ( $Fe_2O_3$ ) 18.69%の割合であった。一方、ガラス質成分は低減して14.115%に留まっている。しかし、砂鉄特有成分の二酸化チタン ( $TiO_2$ ) は8.81%、バナジウム (V) 0.17%と高く、精錬鋳冶も初期段階での排出と考えられる。酸化マンガン (MnO) も0.60%と多いのは、チタン、バナジウムと同様である。

## まとめ

中世の烟中遺跡は、鋳冶原料の荒鉄（製錬生成鉄で表皮スラグや捲込みスラグ、炉材粘土などの不純物を含む原料鉄）の成分調整を目的とした精錬鋳冶（大鋳冶）が行われた鋳冶工房跡である。

今回調査した3点の鋳冶炉の炉底に堆積形成した楕円形の鉄滓は、精錬鋳冶工程の初期段階から後工程へと順を追って漸次移行したもののが選別されていた。化学組成の二酸化チタン ( $TiO_2$ ) を指標にすると、SMB-3 ( $TiO_2 \rightarrow 8.81\%$ )、SMB-2 ( $TiO_2 \rightarrow 4.10\%$ )、SMB-1 ( $TiO_2 \rightarrow 3.15\%$ ) の順となる。

砂鉄特有成分である二酸化チタン ( $TiO_2$ ) は、製錬において約2倍程度濃縮されるが（製錬滓成分）、鋳冶工程の精錬鋳冶工程（数回以上繰返す）、鋳錬鋳冶工程に入ると、漸次低減される。

烟中遺跡の鋳冶に供された荒鉄は、還元性の高チタン含有の塩基性砂鉄が始発原料になっ

たと想定される。第2表に示した参考試料今福遺跡(2L-841)出土製錬滓の二酸化チタン( $TiO_2$ )の実績が22.51%であって、これの原料砂鉄の二酸化チタン( $TiO_2$ )は11%前後である。畠中遺跡の荒鉄の始発原料も類似試料の組成や二酸化チタン( $TiO_2$ )量から推定して、この程度のものと考えられる。

今回の畠中遺跡から出土した約90kgの鉄滓中には、鍛冶原料となった荒鉄も混在する可能性をもつものの、筆者がそれらを識別する時間がなくて確認できなかった。後日に期したい。なお、鍛冶原料の荒鉄(鉄塊系遺物)の組成については瑞穂町所在京ノ坪遺跡出土品がある。これの報告が別途あるので、参照頂ければ幸いである。<sup>④</sup>

### 注

- ① 日刊工業新聞社『焼結鉱組成および識別法』 1968
- ② ①と同じ
- ③ 鉄滓中の成分動向は復元実験炉において確認されている。  
拙稿「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立風土記の丘年報』15(平成3年度)千葉県立房総風土記の丘 1992. 10. 1
- ④ 拙稿「房総風土記の丘「鐵づくり」実験品の化学組成と耐火度調査結果」年報16 1993. 12. 25  
⑤ 拙稿「京ノ坪遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」[京ノ坪遺跡]長崎県瑞穂町文化財調査報告書 第2集 1994

第2表 供試材の化学組成

分析番号	試験番号	重土灰灰	重土灰	酸素含有量	全元素含有量	主元素含有量	FeO/(FeO+MnO) (%)	(Total)/MnO (%)	酸化物含有量		酸化物含有量		酸化物含有量	酸化物含有量	酸化物含有量	酸化物含有量	酸化物含有量	
									SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	FeO	MnO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	
NH01.1	重	/	NH	2E	5.22				56.91	44.65	40.76	10.67	3.75	1.31	1.26	1.46	3.90	3.95
2	E	E	E	E		中性	E	E	57.35	1.59	3.39	3.27	30.40	21.26	1.80	1.50	5.14	1.16
4	E	E	E	E		酸性	E	E	56.76	1.59	41.85	38.36	4.43	1.65	1.65	3.56	3.15	4.41
5	E	E	E	E		中性	E	E	56.92	11.31	16.40	14.75	6.01	2.23	1.62	2.50	0.36	2.26
9	E	E	E	E		酸性	E	E	57.55	1.59	22.57	33.77	14.26	6.15	3.41	5.55	5.45	4.06
11	E	E	E	E		酸性	E	E	57.35	1.59	41.99	18.89	3.27	12.27	6.61	5.99	2.05	1.14
15	E	E	E	E		酸性	E	E	56.96	1.59	43.37	38.30	2.91	0.20	0.56	0.16	0.13	0.13
SNH-1	重	E	E	E		中性	E	E	56.92	36.39	10.37	29.41	5.41	0.62	2.20	2.11	0.60	5.14
2	E	E	E	E		中性	E	E	57.25	1.55	42.46	22.46	15.38	5.35	2.27	1.75	5.60	0.44
3	E	E	E	E		中性	E	E	56.95	1.17	34.98	18.99	3.32	1.96	3.08	0.15	5.81	4.10
21.61.1	重	E	E	E		酸性	E	E	57.45	1.59	21.37	21.22	7.34	7.59	1.19	—	—	0.34
2.2.5d	E	E	E	E		酸性	E	E	57.42	1.59	22.37	17.55	5.11	1.50	—	—	0.26	2.71
6.1.6d	E	E	E	E		中性	E	E	56.92	36.39	10.37	29.41	5.41	0.62	0.81	1.17	0.16	5.35
2.4.5c	E	E	E	E		中性	E	E	57.42	1.59	22.46	15.38	5.35	2.27	1.75	5.60	0.44	0.85
3.2.4d	E	E	E	E		中性	E	E	57.45	1.59	21.37	21.22	7.34	7.59	1.19	—	—	0.34
21.62.1	重	E	E	E		酸性	E	E	57.45	1.59	22.37	17.55	5.11	1.50	—	—	0.26	2.71
J.9.1	E	E	E	E		中性	E	E	56.92	36.39	10.37	29.41	5.41	0.62	0.81	1.17	0.16	5.35
J.9.51	E	E	E	E		酸性	E	E	56.92	36.39	10.37	29.41	5.41	0.62	0.81	1.17	0.16	5.35
J.9.51	E	E	E	E		酸性	E	E	56.92	36.39	10.37	29.41	5.41	0.62	0.81	1.17	0.16	5.35
21.63.1	重	E	E	E		酸性	E	E	57.42	1.59	22.46	15.38	5.35	2.27	1.75	5.60	0.44	0.85
21.64.1	重	E	E	E		酸性	E	E	57.42	1.59	22.37	17.55	5.11	1.50	—	—	0.26	2.71
21.64.7	重	E	E	E		酸性	E	E	57.42	1.59	22.37	17.55	5.11	1.50	—	—	0.26	2.71
21.64.11	重	E	E	E		酸性	E	E	57.42	1.59	22.37	17.55	5.11	1.50	—	—	0.26	2.71
8.E.61	全般観	E	E	E		中性	E	E	56.92	36.39	10.37	29.41	5.41	0.62	0.81	1.17	0.16	5.35

## 参考

1. 大熊江二「当面課題」(鉱業地質、地質地図の今後の問題)、「ワカサガ研究」農林省地質調査所地質地圖室編、1954。

2. 大熊正己「今後地質地圖の問題とその解決策」(地質地圖室研究会講演)、「地質地圖室研究会」第9回。

3. 人間町千一「地質地圖の問題とその解決策」(地質地圖室研究会講演)、「地質地圖室研究会」第10回。

4. 齋藤大輔・寺川千洋「土壤地質地圖計画の問題」(地質地圖室研究会講演)、「地質地圖室研究会」第11回。

5. 石田正徳「小石子選別」(地質地圖室研究会講演)、「地質地圖室研究会」第12回。

6. 石田正徳「小石子選別」(地質地圖室研究会講演)、「地質地圖室研究会」第13回。

7. 大熊正己「地質地圖の問題とその解決策」(地質地圖室研究会講演)、「地質地圖室研究会」第14回。

8. 田嶋、野瀬、原川「地質地圖の問題とその解決策」(地質地圖室研究会講演)、「地質地圖室研究会」第15回。

9. 古川正路「小石子選別」(地質地圖室研究会講演)、「地質地圖室研究会」第16回。

(1) SMB-1

①×200硬度圧痕  
Wustite : 549Hv 200 g

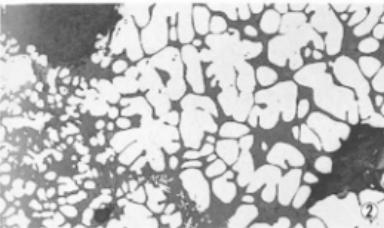
②×100

Wustite粒内析出物  
(鉄(Fe) - チタン(Ti) 化合物)  
③×400  
④の拡大



1 / 4.5

①



2

②

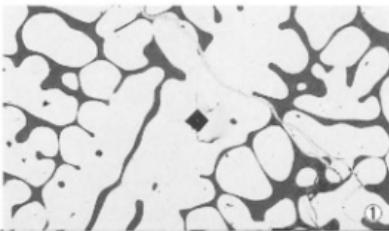
(2) SMB-2

⑤×100 ⑥×400  
Wustite + Ulvöspinel  
Wustite粒内析出物  
(鉄(Fe) - チタン(Ti) 所出物)  
⑦×200 硬度圧痕  
Wustite : 540Hv  
荷重200 g  
⑧×200  
Ulvöspinel : 733Hv  
荷重200 g

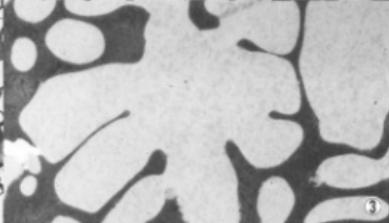


1 / 3.6

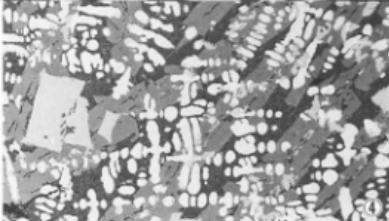
③



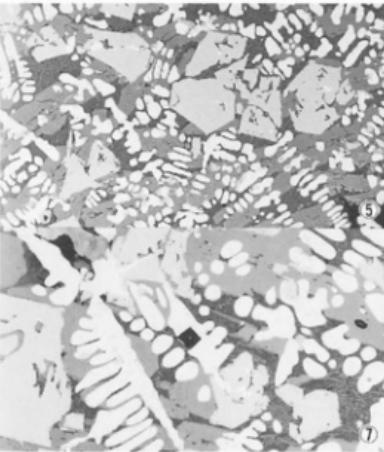
④



⑤



⑥



5

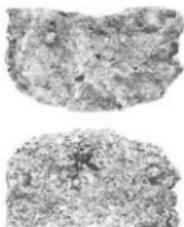
⑦



⑧

Photo. 1 鉄の顕微鏡組織

(3) SMB-3



①×100 Wüstite + Ulvöspinel	②×400 ①の拡大 Wüstite粒内析出物
③×100 Wüstite + Ulvöspinel	④×400 ③の拡大 Wüstite粒内析出物
⑤×100 Wüstite + Ulvöspinel	⑥×400 ⑤の拡大 Wüstite粒内析出物
⑦×200硬度圧痕 Wüstite : 509 Hv 荷重200 g	⑧×200硬度圧痕 Ulvöspinel : 766 Hv 荷重200 g

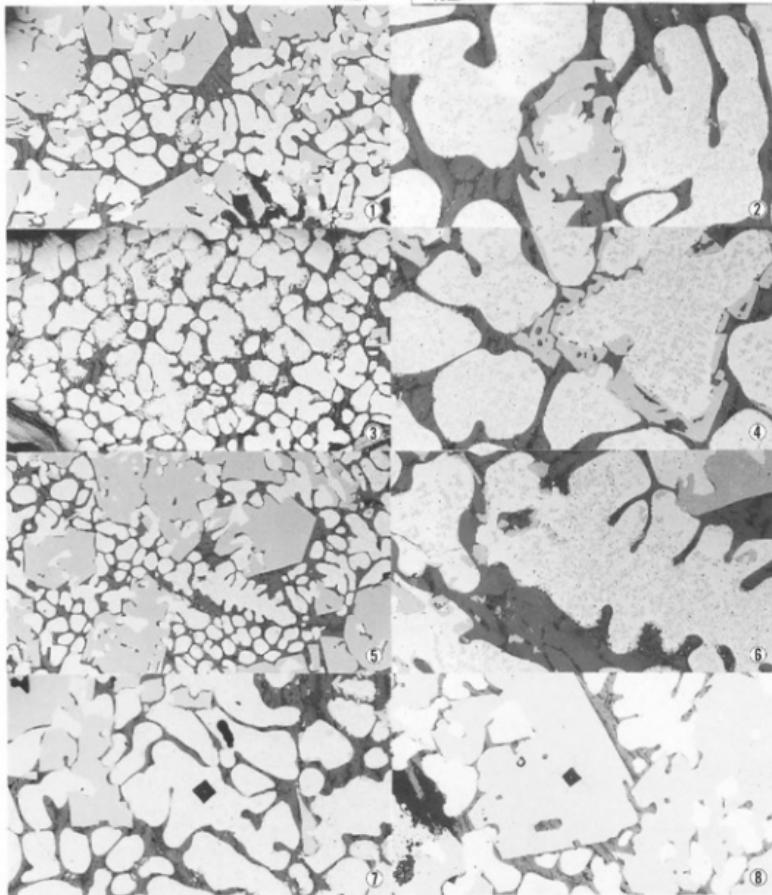


Photo. 2 鉄 sulfide の顕微鏡組織

## VII まとめ

畠中遺跡を時期別に概観してみると、数量的な割合でみれば、縄文時代晚期前半代、中世の時期では、14C後半代等にそれぞれピークがありそうである。

まず縄文時代晚期では、当該遺跡を島原半島の縄文時代晚期の時期別の変遷でみてみると、穂石原遺跡→畠中遺跡→山の寺梶木遺跡→原山遺跡の序列が考えられるが、山の寺梶木遺跡の時期から刻目凸帯文土器が出現し、その後の原山遺跡の時期に支石墓が出現していくことになる説であるが、畠中遺跡は凸帯文土器が出現する前夜の段階にあたることになる。墳墓関係でみると、今回の調査に限っては、埋カメしか検出していない。

中世の時期の遺構では、ほぼ90°に直交する溝、この溝に囲まれた範囲の中に建物跡、F-11区に鍛冶場遺構等を検出している。出土遺物でみると、本県に於いては珍しい常滑窯の壺、そして、東海地方の陶磁器片、中国の錢貨（太平通宝、至元通宝）も出土している。直交する溝も北側が道路によって切られているので、もし北側と西側に溝が存在したとすれば、方形区画の溝で区画された屋敷地ということになる。

文献によれば、当該遺跡が所在する三会原の寺中名字城ノ鼻には中世の古城址（寺中城・北浦城）があり、有馬氏の家臣和泉氏の居城であったと伝えられている。

また、三会という地名は南北朝期から見える地名で、肥前国高来郡のうち。三重・三江・見江とも見え、康永4年（1345年）10月27日に足利尊氏下文（正閏史料二之一所収厚母文書／南北朝遺2148）によれば、このとき將軍足利尊氏は開田出羽前司遠長をして「父出羽權守資長法師〈法名行素〉建武二年二月三日謙状」にさせて、肥前国高来郡東郷内三会村地頭・預（所脱か）両所職以下を安堵せしめているが、これによって開田氏が高来東郷内三会村の地頭職・預所職を持ったのは少なくとも建武2年（1335年）以前、遠長の代にさかのぼるといわれている。

今回の調査では、当該遺跡をこの開田氏の地頭館として特定するには至っていないが、この畠中遺跡の14C後半代の出土遺物等の多さから、なんらかの関係を推考させる。今後はこの地に於いては、縄文時代晚期だけに限らず、中世に於いても注意を要する場所になるだろう。

### 《参考文献》

『角川日本地名大辞典』 42長崎県 角川書店

図 版



遺跡近景・有明海を望む（西側から）



遺跡近景（東側から）

図版 2



遺構検出状況（駐車場部分を北側から）



遺構検出状況（駐車場部分を南東から）



排水板状況（建物基礎部分北側）



基礎部分（東端）



同右（中）

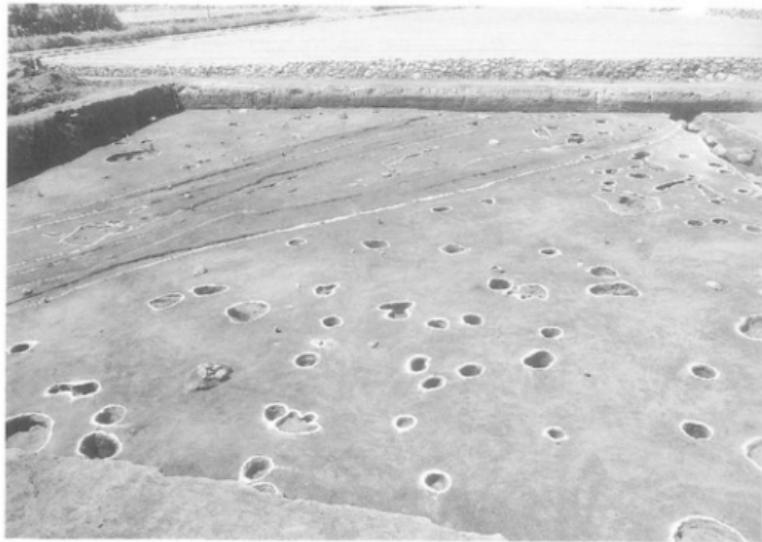


浄化槽部分（南から）



同右（南）

図版 4



遺構検出状況（駐車場部分南半部、東から）



遺構検出状況（駐車場部分、北西から）



調査風景



東西に走る溝



調査風景

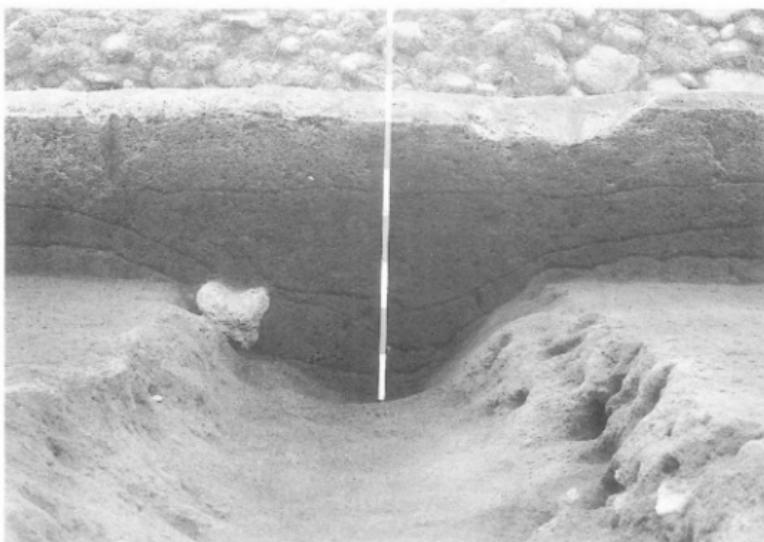


駐車場部分（北側）



建物基礎部分東側土層

図版 6



E-2 区西侧、土層及び溝断面



點穴状遺構（西から）

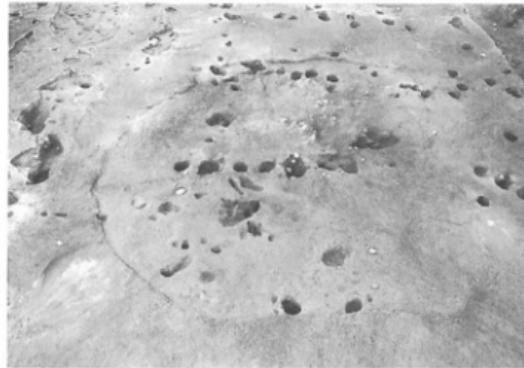
駐車場部分南半部(東から)



溝断面状況



竪穴状遺構  
(集石を取り除いたところ)



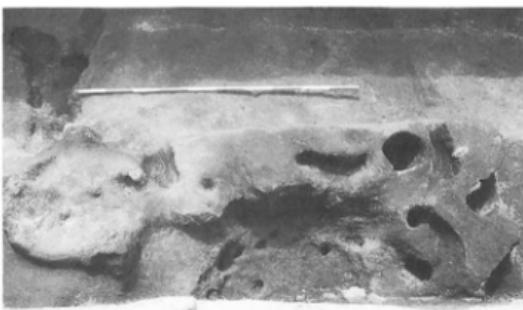
図版 8

製鉄遺構 (F-11区)



同 上

(北から、掘り下げ以前)

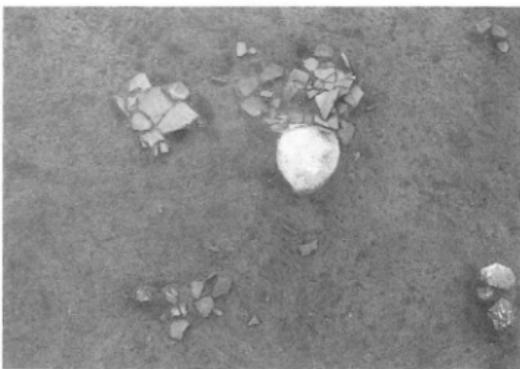


J-9 区製鉄遺構



図版 9

埋カメ 2 号



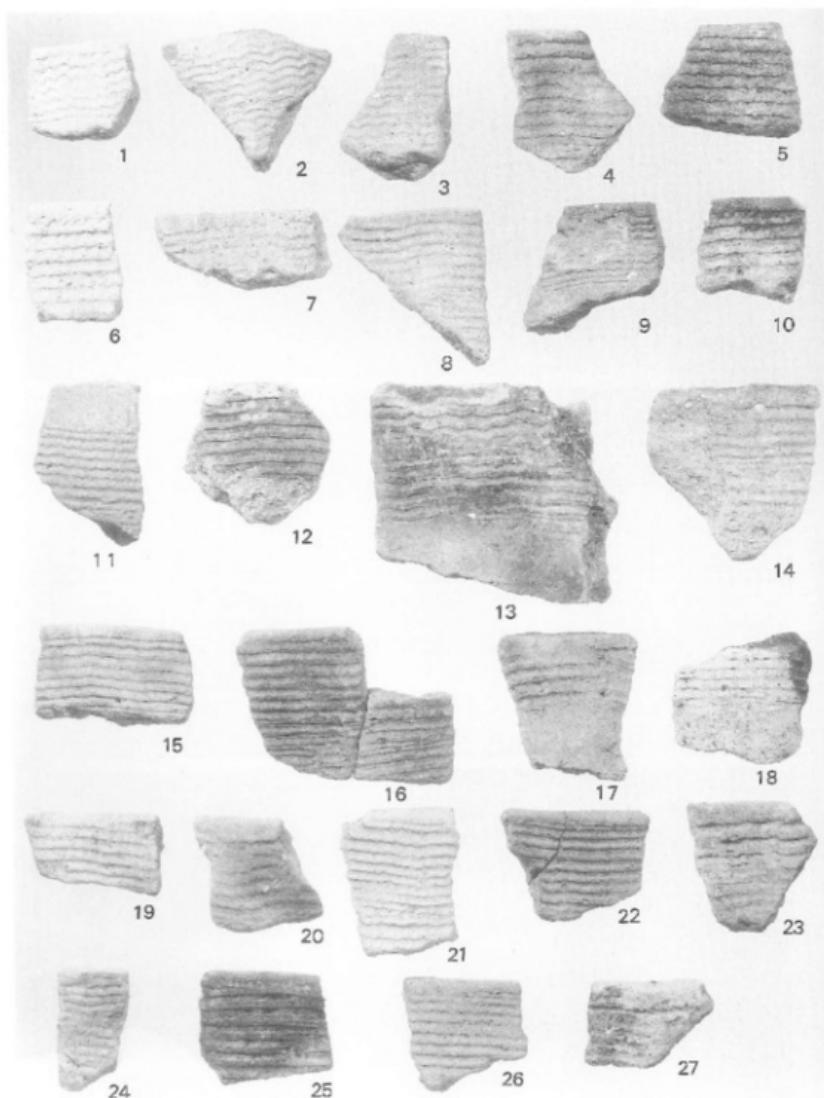
同 3 号



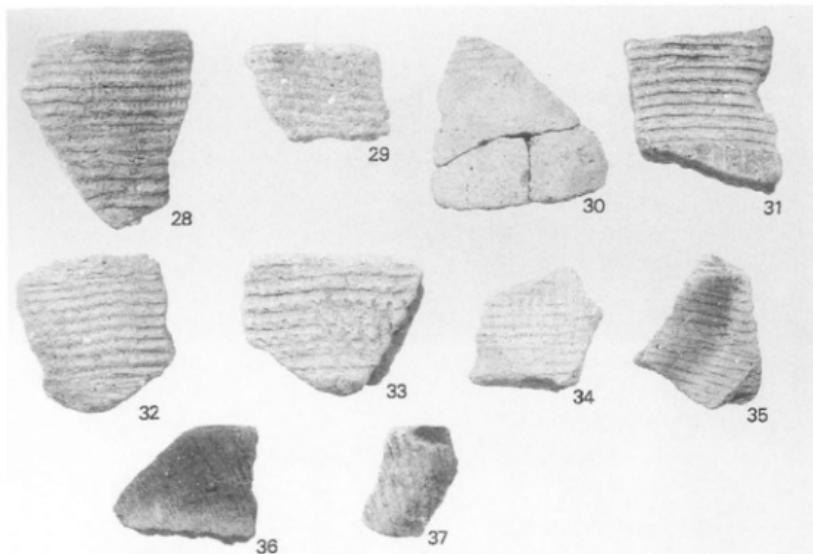
同 4 号



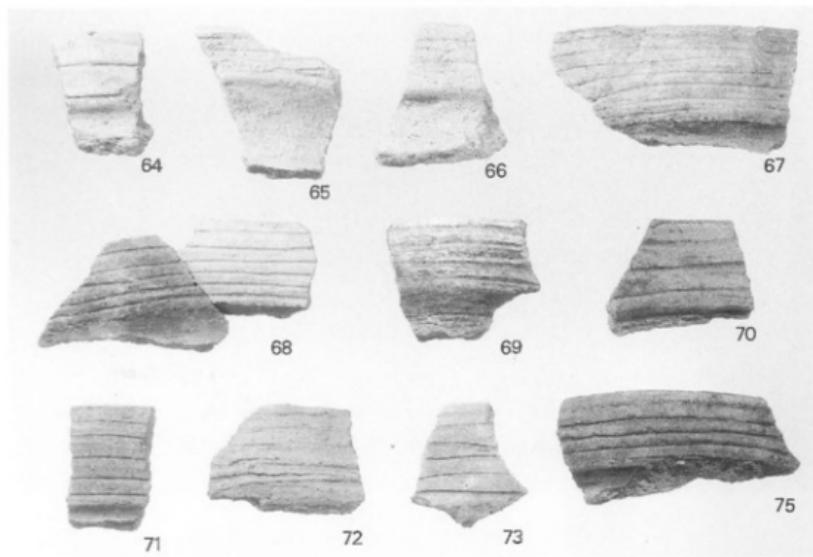
図版10



縄文時代の土器（前期）

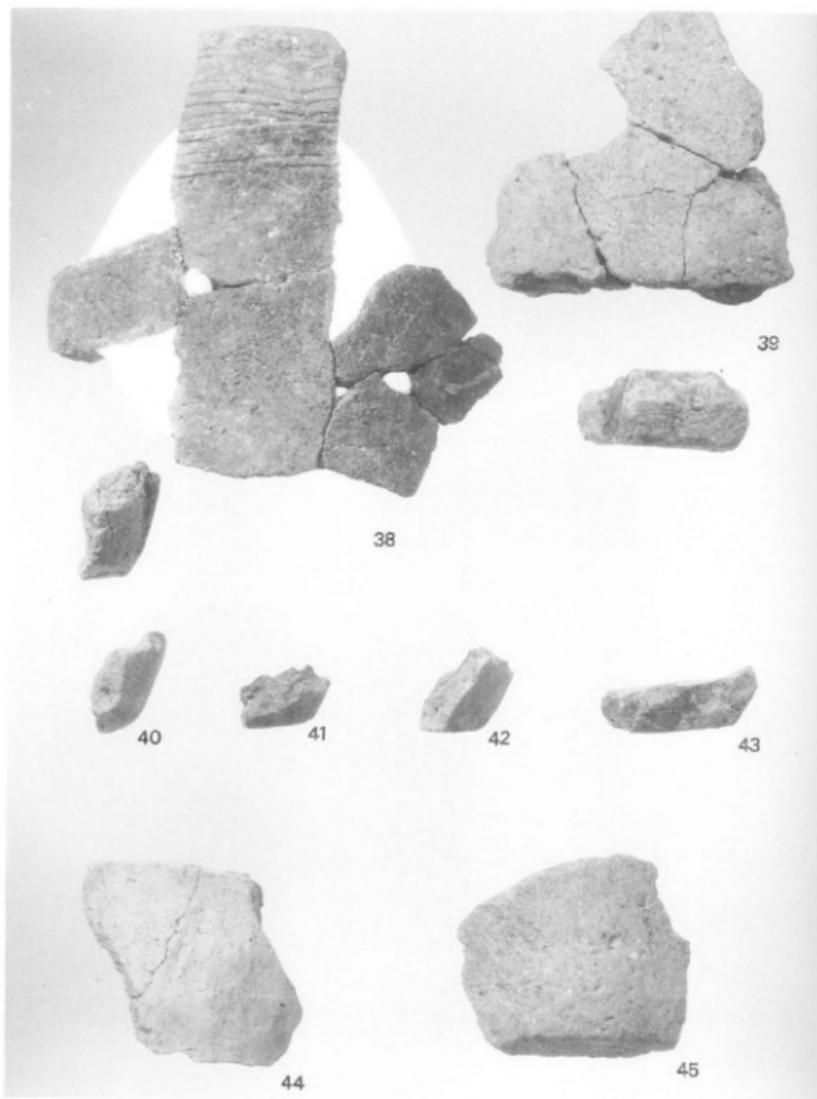


縄文時代の土器（前期）

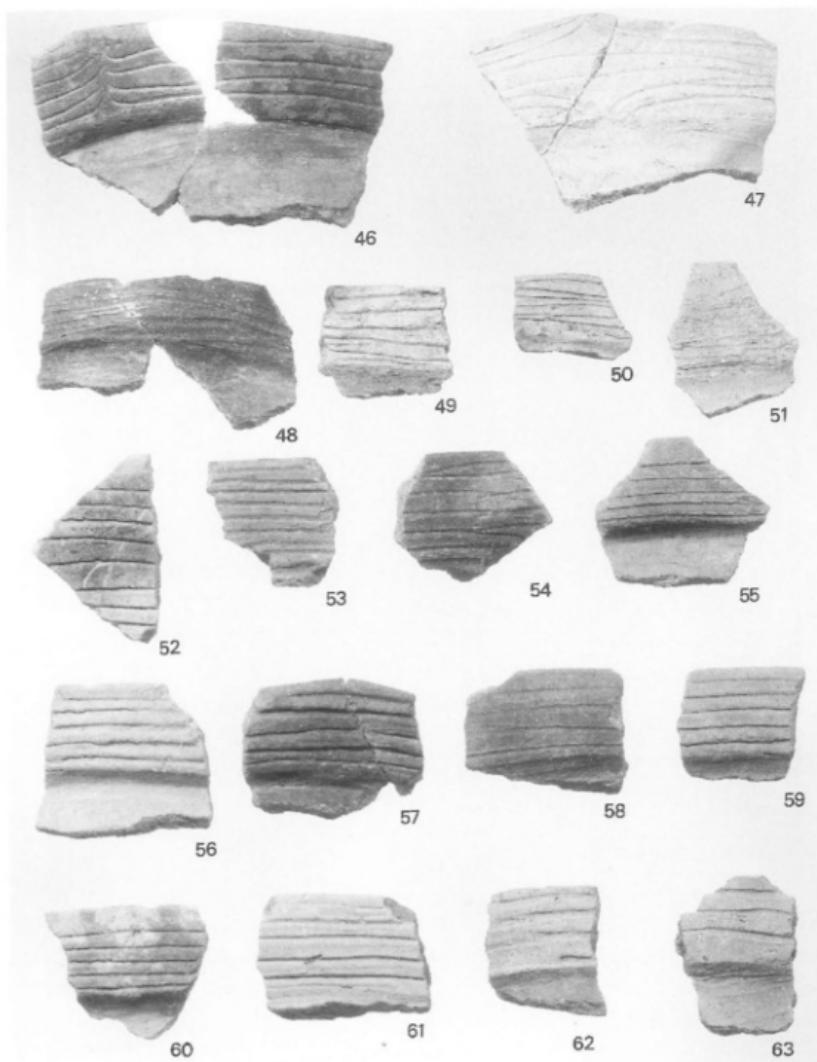


縄文時代の土器（晩期）

図版12



縄文時代の土器（前期）



縄文時代の土器（晚期）



74

縄文時代埋カヌ



76

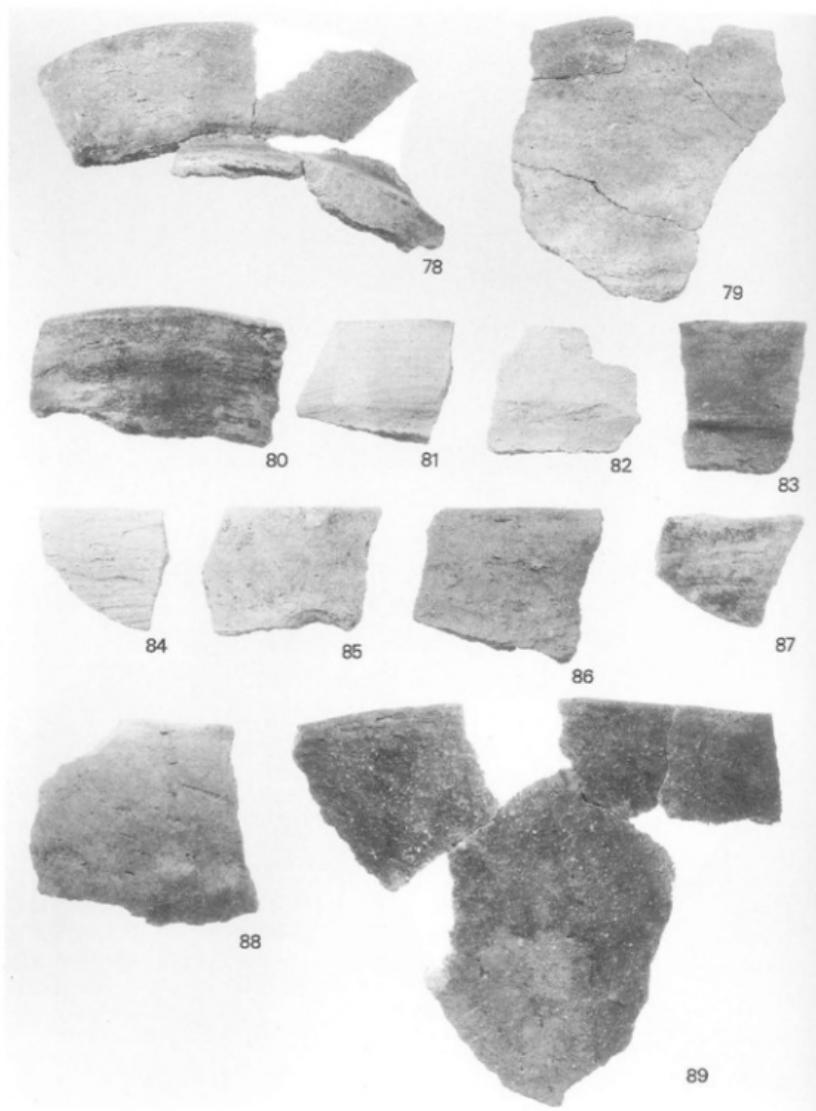


77

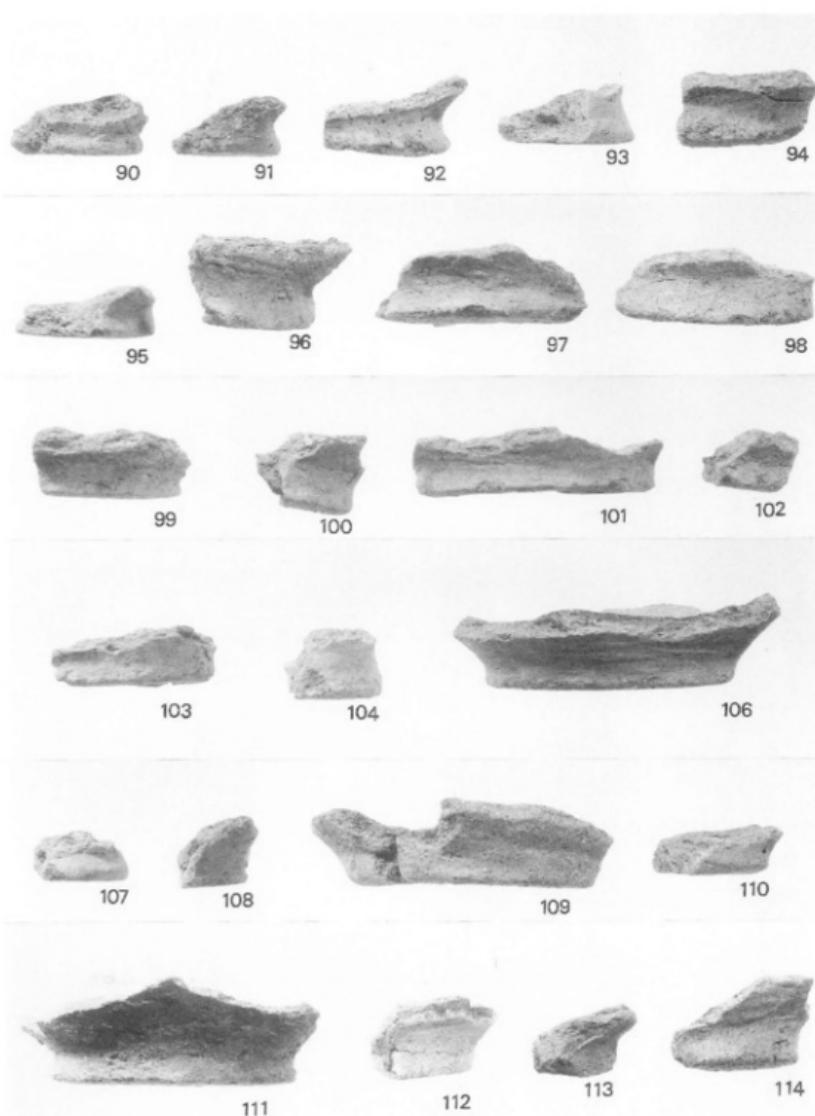
縄文時代埋カヌ

— 67 —

図版16

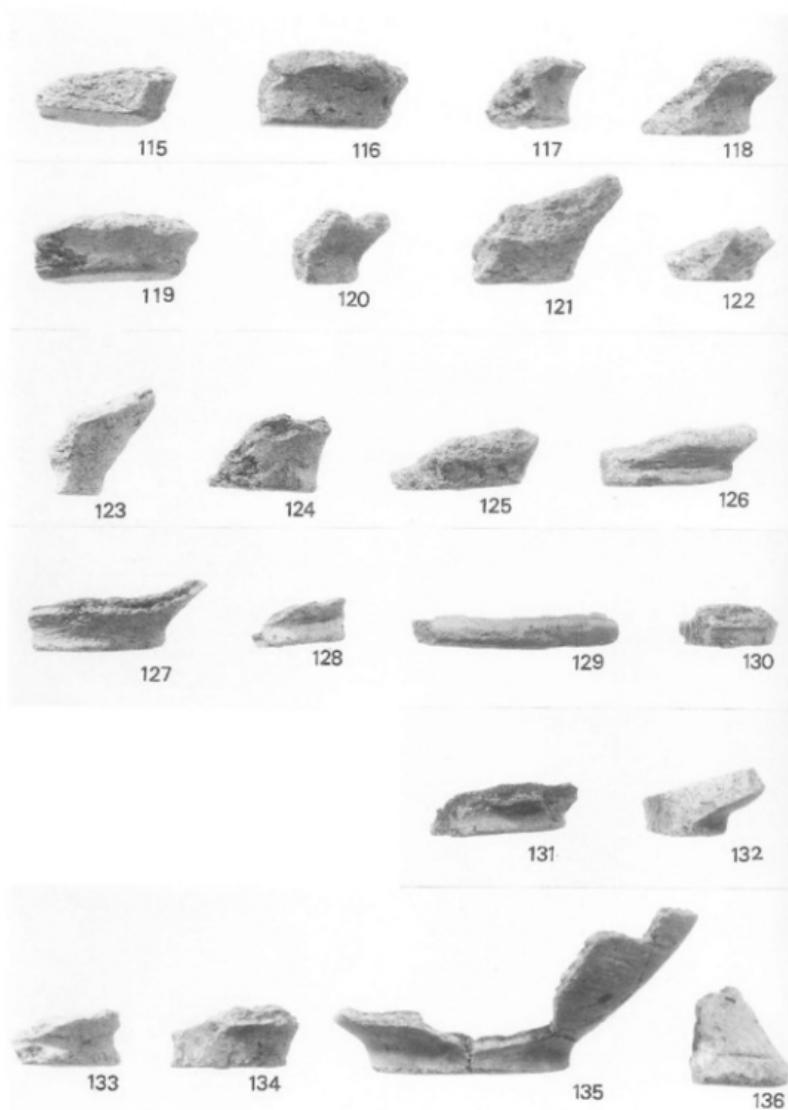


縄文時代土器（晩期）



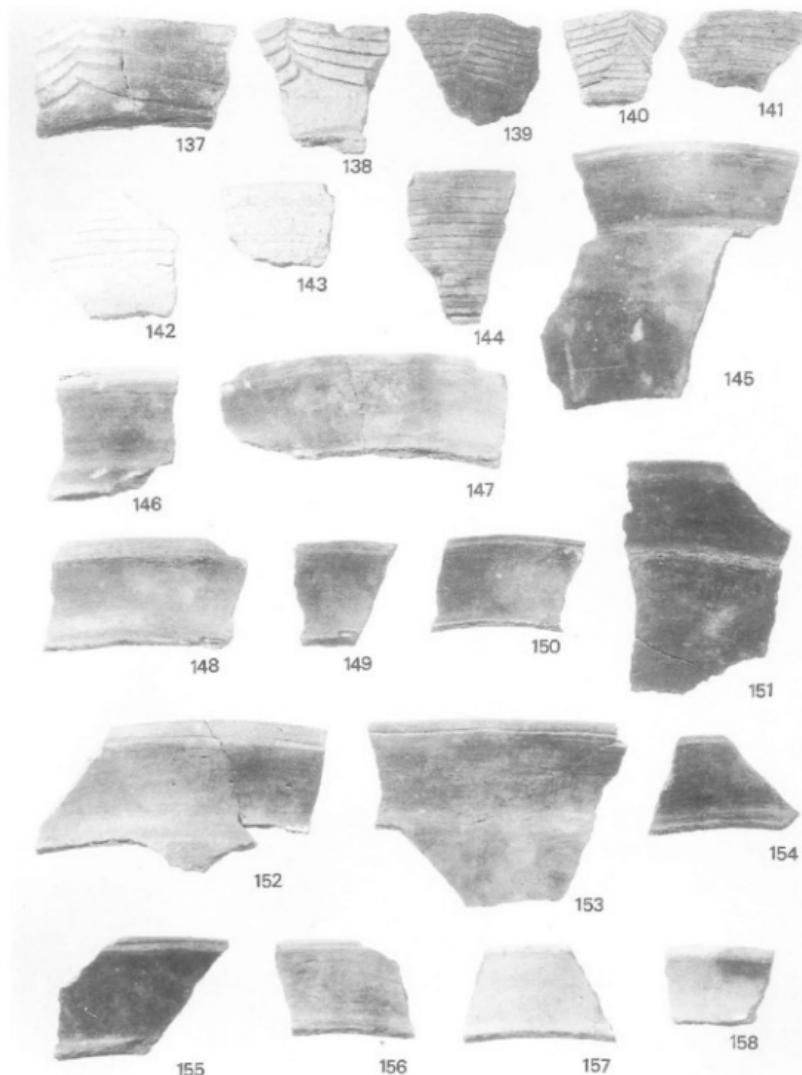
縄文時代土器（底部）

図版18



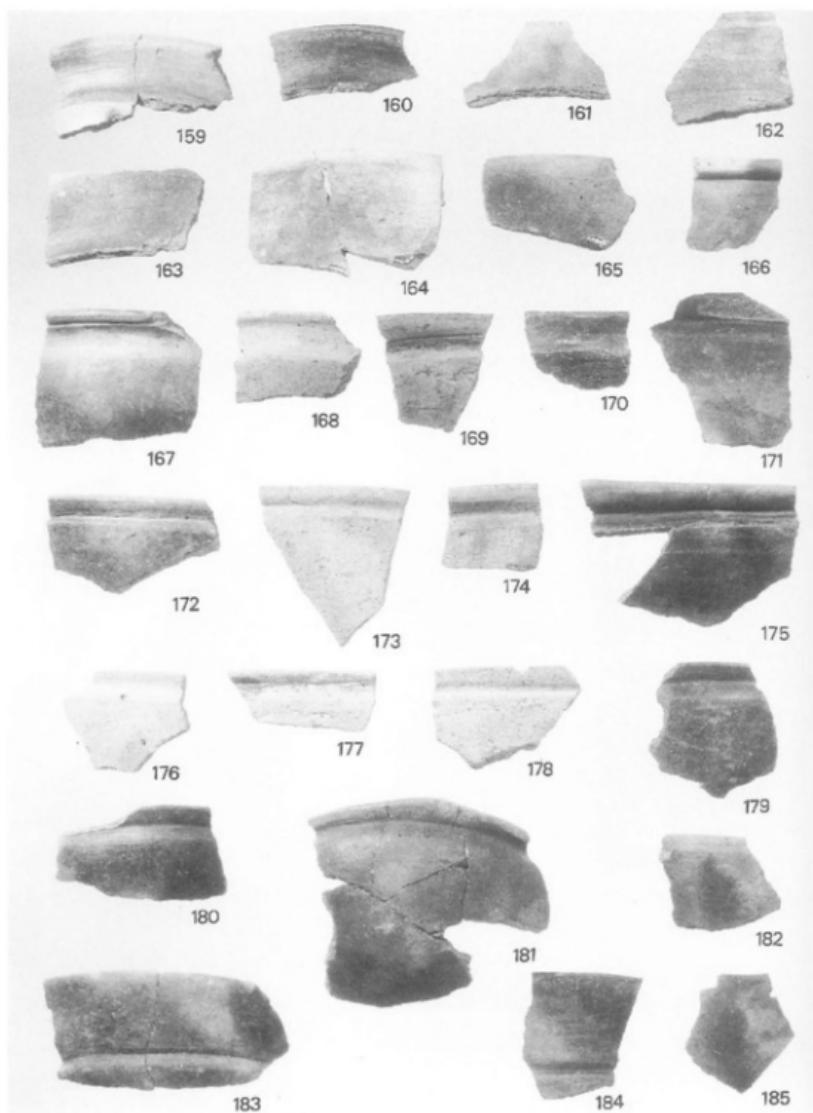
縄文時代土器（底部）

図版19



縄文時代土器（晩期）

図版20



縄文時代土器（晩期）

島原市埋蔵文化財調査報告書第9集

## 畠中遺跡

平成6年3月

発行 島原市教育委員会  
〒855 島原市上の町537番地

印刷 (株)昭和堂印刷  
〒854 謙早市長野町1007番地